2023年度

次世代人材育成事業

『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー

実績報告書

《主催》 公益財団法人 滋賀県国際協会

《協力》 国際教育研究会 Glocal net Shiga

《後援》 滋賀県、滋賀県教育委員会、JICA関西、滋賀県高等学校国際教育研究協議会、滋賀県青年海外協力協会

2023年度 次世代人材育成事業『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー報告書

公益財団法人 滋賀県国際協会

2023年度次世代人材育成事業
『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー

（公財）滋賀県国際協会は、昨年度に続き、世界と自分とのつながりや私たちが暮らす地域について再認識することで、持続可能な社会づくりや地域の活性化に向けて、実際に行動できる人材の育成をめざした連続セミナーを開催しました。

【プログラムの概要】

連続セミナー６回・オプショナル企画（以下「ＯＰ」）（希望者のみ）５回実施

日程・会場	内　　容
第１回　**7月15日(土)**　**【終日】** ピアザ淡海（大津市）	**オリエンテーション**　本セミナー、在住外国人の状況についての説明など **参加者同士の新たな出会い** 開発教育についてミニ講義、ワークショップ体験など
ＯＰ①　7月29日(土) オンライン事前レク	**日本ラチーノ学院について** 日本ラチーノ学院の沿革、事前質問に対する学校側の回答の共有など
第２回　**8月３日(木)**　**【終日】** 日本ラチーノ学院（東近江市）	**ブラジル人学校の生徒との出会い** 日系移民の歴史、日系の生徒によるファミリーヒストリー発表など
ＯＰ②　9月２日(土) キラリエ草津（草津市）	**日本語教室見学** 日本語教室「オリーブ」の見学
ＯＰ③　9月３日(日) オンライン事前レク	**イスラム教について** イスラム教の基礎知識について説明
第３回　**9月10日(日)**　**【終日】** モスク　アン　ヌール能登川（東近江市）	**ムスリム（イスラム教徒）との出会い** 礼拝見学後、宗教的価値観、日本での暮らしについてなどフリートーク
第４回　**10月14日(土)** 【午前】　滋賀朝鮮初級学校　（大津市） 【午後】　渡来人歴史館（大津市）	**日本に根付く朝鮮半島の歴史と今との出会い** 【午前】滋賀朝鮮初級学校　授業見学 ＆ フリートーク 【午後】渡来人歴史館　　専門員によるガイドツアー、全体共有ふりかえり
ＯＰ④　10月28日(土) ピアザ淡海（大津市）	**ベトナム人コミュニティの方たちとの交流会** 自己紹介タイム、アイスブレイキング(フォトランゲージ)、インタビュータイム
第５回　**11月25日（土）**　**【終日】** ピアザ淡海（大津市）	**これまでの学びのふりかえり** ワークショップ体験、これまでの訪問先での学びの共有など
第６回　**12月16日（土）**　**【終日】** ピアザ淡海（大津市）	**多文化共生に関する講演および受講生による発表会** 多文化共生についての講義 《講師》（一財）ダイバーシティ研究所　代表理事　田村　太郎さん 連続セミナーでの学びから、今後のアクションプランを発表しよう！
ＯＰ⑤　2月11日(日) 神戸市内	**神戸　宗教関連施設を巡るスタディツアー** 海外移住と文化の交流センター、シナゴーグ、神戸ムスリムモスク、 神戸華僑歴史博物館、兵庫マスジット Jan Academy訪問

目　　次

事業概要、参加者について　1・2P
活動記録アルバム　3～10P
各回セミナーの報告　11～39P
グループ発表（各グループのスライド）　40～47P
事後アンケートまとめ　48～55P
あとがき

【参加者について】

- 県内の大学生、教員、公務員を含む社会人　19人が受講（うち、18人が修了）。
  受講生の中には、海外ボランティア経験者（カンボジア）、アメリカ出身者を含む。
- 滋賀県国際交流員（ブラジル、イギリス出身）、県内の留学生（中国、フィリピン、インドネシア出身）、
  昨年度の修了生など延べ18人がサポーターとして協力。

参加者名簿

【受講生（修了生）】

	名　前			名　前	
1	ハモンド　エミリー	社会人	10	永　潤	社会人
2	新山　晴日	大学生	11	村長　りか	社会人
3	池本　愛	中学校教員	12	村長　とも	公務員
4	折居　夏帆	大学生	13	岡谷　ともみ	社会人
5	目　淑乃	大学生	14	本間　有紀	公務員
6	平岡　恵美	社会人	15	若杉　朋子	社会人
7	相馬　大耀	大学生	16	山越　栄太郎	小学校教員
8	是永　弥里	大学生	17	福士　瑠奈	大学生
9	堀井　涼花	大学生	18	山口　絢加	社会人

【サポーター】

	名　　前	所　　属
1	ガブリエル　ギマランイス	滋賀県国際交流員（CIR）　ブラジル
2	ハリー　ブロートン	滋賀県国際交流員（CIR）　イギリス
3	小寺　真代	社会人
4	森川　真秀	JICA滋賀デスク（元ベリーズ隊員）
5	福西　真美	JICA奈良デスク（元インド隊員）
6	唐　暢	びわこ奨学生　龍谷大学院生（中国）
7	徐　雯	びわこ奨学生　聖泉大学生（中国）
8	カララン　アーネスト　プルヴェラ	びわこ奨学生　滋賀県立大学院生（フィリピン）
9	メルビン　エロール　スレイマン　キサム	びわこ奨学生　立命館大学生（インドネシア）
10	李　憶静	びわこ奨学生　聖泉大学生（中国）
11	張　璟霞	びわこ奨学生　滋賀大学院生（中国）

＊「びわこ奨学生」…当協会外国人留学生びわこ奨学金支給制度「びわこ奨学金」を受給する留学生
上記の他、昨年度修了生がサポーター兼参加者として参加

【ファシリテーター】　国際教育研究会　Glocal net Shigaメンバー

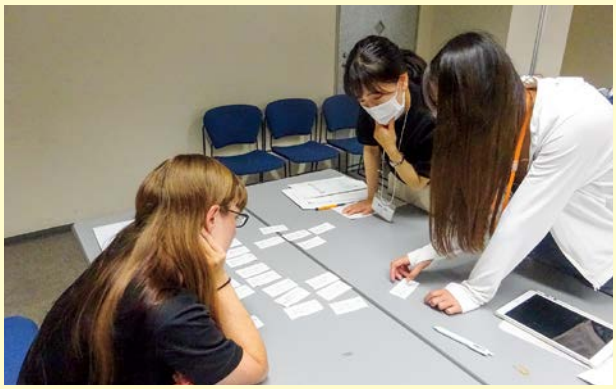
担 当 回	名　　前	担 当 回	名　　前
第１回・第５回	大槻　一彦	第２回・第３回	川﨑　功
第２回・第４回	川辺　純子	第４回	竹辺　このみ

活動記録アルバム

第１回　参加者同士の新たな出会い

開会あいさつ

合意形成ゲーム　砂漠で遭難したら？



アクティビティ　桶屋が損する

感想共有

アクティビティ　座ってください

フォトランゲージ　地球の食卓

世界がもし100人の村だったらワークショップ

アクティビティ　アミーゴを探せ！

第２回　ブラジル人学校の生徒との出会い

自己紹介タイム

アクティビティ　あいさつがわからない

フォトランゲージ　日本？ブラジル？

日本移民の歴史を動画で学ぶ

ファミリーヒストリー　生徒発表

ファミリーヒストリー　ゲスト発表

意見交換のようす

ふりかえり

第３回　ムスリム（イスラム教徒）との出会い

イスラム教について説明

礼拝前のお清め体験

礼拝のようす（女性）

礼拝のようす（男性）

食事のようす（女性）

食事のようす（男性）

インタビュータイム

ふりかえり

第４回　日本に根付く朝鮮半島の歴史と今との出会い

授業見学

鄭理事長からのお話

児童発表　サムルノリ

児童発表　朝鮮舞踊

渡来人歴史館　大澤専門員のお話

展示ガイドツアー

ふりかえり

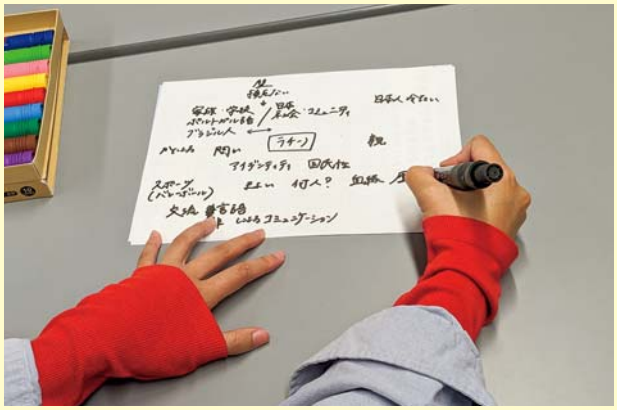
グループ発表

第５回　これまでの学びのふりかえり

グループ分け

アクティビティ　日本代表チームをつくろう

各訪問先についてふりかえり



印象に残ったことを書き出す作業

ふりかえりの共有

ふりかえり（ワールドカフェ）

ふりかえり

ふりかえり

第６回　多文化共生に関する講演よび受講生による発表会

講師　(一財)ダイバーシティ研究所
代表理事　田村　太郎さん

グループ発表のようす

修了証授与　グループ１

修了証授与　グループ２

修了証授与　グループ３

修了証授与　グループ４

交流会のようす

ふりかえり

受講を終えて感想発表

オプショナル企画

【ＯＰ①】事前オンラインレク
ブラジル人学校について
2023年7月29日　参加者22人

【ＯＰ②】日本語教室「オリーブ」見学
オリーブについて説明
2023年９月２日　参加者８人

【ＯＰ③】事前オンラインレク
イスラム教について
2023年９月３日　参加者15人

日本語指導のようす

【ＯＰ④】ベトナム人コミュニティとの交流会
2023年10月28日　参加者17人

ベトナムコミュニティのみなさんとの
集合写真

【ＯＰ⑤】神戸スタディツアー　シナゴーグ
2024年２月11日　参加者19人

神戸ムスリムモスク

集合写真

日本ラチーノ学院　教室１にて

日本ラチーノ学院　教室２にて

モスク　アン　ヌール能登川にて

最終発表を終えて

各回セミナーの報告

受講生による記録を基に編集しています。

第１回　参加者同士の新たな出会い

【開催日時】2023年７月15日（土）
【参加者数】受講生：15人　　サポーター：６人
【会　　場】ピアザ淡海（大津市）
【ファシリテーター】
　○オリエンテーション、在留外国人の現状説明（(公財）滋賀県国際協会　大森　容子さん）
　○ワークショップ体験（国際教育研究会　Glocal net Shiga　大槻　一彦さん）
　オリエンテーション、在留外国人の現状についての説明、受講生による自己紹介のあと、ワークショップ体験を行った。

≪午前≫

（１）在留外国人の現状について

　現在日本で暮らす外国人は300万人ほどであり、県内では３万６千人の外国人の方が生活されている。日本で生活する理由は、就学や労働、安全な生活を求めてなど多様であるが、生活するうえで様々な困難を抱えておられる現状がある。

　県内で暮らす外国人の割合は、約40人に１人となっている。出身国は108か国・地域ということで、世界各国からの在留外国人の方々が暮らしておられる。全国的にみると、中国人の割合が高いことに対して、県内ではブラジル国籍、日系ブラジル人の方の割合が高い。ブラジルに次いで、ベトナム、中国、韓国・朝鮮の順で多くなっている。ブラジル国籍の方は、保護者の就労に伴って家族で来日する傾向がある。フィリピンは配偶者の方が多く、ベトナムからは、留学生や実習生として来られる方が多い。

（２）理想的な多文化共生社会と現状のズレや摩擦

　こうした社会をつくるうえで、３つの壁がある。

①「ことばの壁」…日本語指導が必要な子どもたちに対して適切な指導ができていないこと。高校進学の際、周りの日本人の生徒と同じ基準で受験しなければいけないことや、進学後の日本語指導があまりなされていないこと。

②「制度の壁」…日本国籍がないことにより、就職が不利になる場合があること（国籍条項）。在留資格によっては、給付金や奨学金の対象にならない場合があること。

③「こころの壁」…日本人のように過ごさなければならないことでのアイデンティティのゆらぎ。日本ではブラジル人と言われ、ブラジルでは日本人と言われ、何世代先になったら受け入れてもらえるようになるのかという日系ブラジル人の方々の心のゆらぎなど。

　日本人であろうとも、外国にルーツのある人であろうとも、共に日本社会を構成している一員であるという考え方をもつことで互いの理解を進めることができる。海外から日本を見ることや、世界の状況に関心をもつことがこれからの時代に必要とされることである。

（３）ワークショップ「砂漠で遭難したときにどうするか？」

　砂漠に不時着した際に、飛行機から持ち出せるものを12個の中から３つ選ぶというアクティビティを体験。選ぶ際には、班員とともに検討し、多数決なしで決定することが指示された。

感想

参加者の方々と、ワークショップや昼食時にコミュニケーションをとることができて、初回から良い刺激をいただける時間であった。国際理解教育といえば、外国のことへの関心や理解を高めるといった大きく距離のあるイメージをもっていたけれど、オリエンテーションを通して県内のもっと身近なところでの他者理解が、国際理解教育につながると気づかされた。

ワークショップを通して、物事を考える際には、話し合いのゴールを定めることで話し合いをスムーズに進めることができるということを実感できた。課題解決をグループ内で進めるためには、まずは安心して意見を出せる環境を整えることが必要である。出された意見に対して反対意見をもっていたとしても、まずは他者の考えや意見を受け止めることが必要であり、どのような考えでもこの場では受け止めてもらえると感じられれば、そこからより展開していくことができる。また、話し合いの中では、意見をつなぐ役割や、次のトピックに切り替える役割、共感する役割など状況に合わせて役割分担が必要であると感じた。学級内でことばの壁がある生徒は、このようなグループワークで会話が盛り上がっても状況がわからない場合もあると思うので、その際のサポートについても考えていきたい。　（池本　愛）

≪午後≫

３つのワークショップを体験。ワークショップを通して、世界の様々な価値観、在留外国人の見え方などを学んだ。ワークショップを通して、世界について考えながら一緒に学ぶ参加者と意見を交換し、頭を柔軟にしながら親睦を深めていく。身の回りにある今まで気がつかなかったことや見えなかったことに気づいていくことが目指され、今後の活動にベースを養った。

このワークショップでは３つのルールが設けられた。

1．積極的に参加する
2．時間・空間を独り占めにしない
3．相手を否定しない

（1）アクティビティ①「桶屋が損する」～世界のつながりを感じる～

１グループ４人程度の机に、「はじまりのカード」３枚と「おわりのカード」６枚のあわせて９枚組のカードが配られた。はじまりのカード１枚につき２つのおわりのカードがある。次に、はじめとおわりの間に入る15枚のカードが配られる。どのような経緯でどのような終わりつながるのかを予想してカードを並び替えるアクティビティ。

このワークショップを通して日本で起こった出来事が、どれだけ世界に影響しているかを体験した。

（2）「開発教育」とは　「国際教育」とは（ミニ講義）

＊国際理解教育…過去の世界大戦が起こった原因は、異文化を理解できなかったからではないかと考えられている。異文化理解をすすめるためにはじまった教育。

＊開発教育…先進国と途上国の間に大きな経済システムの差がある。南北問題と開発援助を理解し、問題解決に参画することが大切であることからはじまった教育。

教育において大切なことは、
「聞いたことは忘れる」
「見たことは覚える」
「やったことはわかる」
「発見したことはできる」

（3）アクティビティ②「座ってくださいゲーム」

スクリーンに３つのヒントが順に映し出される。指示の内容が分かった人は座るというゲーム。第１ヒントはヒンディー語。第２ヒントはドイツ語。第３ヒントは日本語で映し出された。全くわからない

文字が目の前にある不安や、文字はわかるが意味が分からない不安を体験した。

感想

在留外国人には日本での生活がどのように見えているかを体験することができた。特にワークショップの座ってくださいゲームでは、意味が分からない文字に対する不安感が理解できた。日本に住んでいる人の大部分は日本語が母国語であり、日本語を何の障害もなく読むことができる。その中で自分だけ読めないという環境に置かれることは今回のアクティビティよりもさらに強い不安感を感じることが容易に想像できる。このような体験を通して身をもって在留外国人の見え方を理解することが大切である。　（折居　夏帆）

（4）アクティビティ③「フォトランゲージ　地球の食卓」

世界の様々な家族が１週間分の食料と一緒に撮影された３枚の写真を使い、質問に対してランキングをつける。

Ｑ１．もし半年ホームステイするなら
→今の生活に近い暮らしを選ぶ人と逆にかけ離れた生活を選ぶ人がいた。

Ｑ２．豊かな生活はどれか
→何をもって豊かというのかグループによってさまざまであった。

Ｑ３．ゴミの出ない生活はどれか
→満場一致で同じ答えになった。

Ｑ４．持続可能な生活はどれか
→Ｑ３と似た答えになった。

Ｑ５．調理時間がかかりそうなのはどれか
→家事の負担に関係し、女性の社会進出の遅れに影響がある。

（5）アクティビティ④「世界がもし100人の村だったら」

ワークショップについての基礎知識を学んだ。ワークショップを通してどんな事が学べるか、またどんな素材を使って展開できるのかなど。「世界がもし100人の村だったら」を使い実際にワークショップを体験し、そこからわかる事について学んだ。

感想

個人的にあまりワークショップに関心がなく、あまり興味がなかったが、実際に体験してみると自分の考えや視野が変化することを実感し、とても良い経験であった。知らず知らずの間に思考は偏り自分の持つ知識に偏りがあることを学んだ。また、初日に参加者と様々なことを語る機会になり一気に親近感が湧いた。　（平岡　恵美）

第２回　「ブラジル人学校の生徒との出会い」

【開催日時】2023年８月３日（木）
【参加者数】受講生：14人　　サポーター：６人　　見学者：２人
【会　　場】日本ラチーノ学院

２つの教室に分かれて、セミナー参加者と日本ラチーノ学院高校３年生が一緒に活動を行った。日本とブラジルとの歴史を学び、ラテン系の生徒たちの視点や苦労、ファミリーヒストリーを理解した。

≪教室①≫

ファシリテーター：川﨑　功さん　Glocal net Shiga

（１）自己紹介・アイスブレイク・意見交換

（ア）自己紹介タイム…　セミナー参加者とブラジル人生徒がお互いに質問を交わす。簡単な質問で、生徒たちに「好きな日本食は？」などを聞いた。生徒たちからはブラジルのイメージについて聞かれた。

（イ）フォトランゲージ…　２枚ずつの写真を見せられ、どちらがブラジルでどちらが日本で撮影されたものかを尋ねられた。ブラジルに今日まで多くの日本文化が残っていることが紹介された。

（ウ）意見交換会…　家の中での靴の履き方、電車内の静かさなど、文化の違いについて話し合った。そして、アイデンティティについて、生徒たちが自分をブラジル人だと感じるか、日本人だと感じるかについて話し合った。

●ブラジルとの文化の違い

- ブラジルについて知っていること、好きなこと
  →サッカー、コーヒーなど
- 嫌いなことは、なし。
- お米の違い（ブラジルはパラパラ）、日本の方がおいしい。
- ブラジルはワンプレート、日本は小皿文化

（２）アニメ動画「100年前のブラジルへ、タイムスリップ！～アニメで学ぼう　移民の歴史～」鑑賞

https://www.youtube.com/watch？v=fWDzUMHc_rg

ブラジルと日本の歴史についての、有益で啓発的なアニメ「100年前へ、タイムスリップ！」を見た。日本に帰ってきた多くの日系の人々が直面する苦難の一端を示すものでもあった。

［ラチーノ学院生徒との意見交換での発言］

「日系の歴史を見てどう思ったか？」

- ブラジル人とフェスタなどに行ってみたいか？
- 街中で外国語を話していてもポルトガル語だとわからない。
- 動画に出てきた山本ファビオの気持ちがわかる。レストランとかに行っても読めないことも多い。
- 動画の中で、一家を上げてブラジルに行ったと説明があったが、なぜ「一家でブラジルへ」なのか？
  ［川﨑さんより解説］
  一人で行ったら辛くて逃げて帰ってしまうが、家族で行くと定住せざるを得ない。これが当時、ブラジル政府が考えた受入政策のねらいだったとのこと。
- 日本はまだ差別が多いので暮らすのが大変。小中学校でいじめも多かった。

［その他の写真の補足説明］

●東山（とうざん）農場の紹介
三菱創始者の岩崎彌太郎氏の長男 岩崎久彌氏により創業されたサンパウロ郊外にある大きな農場。2005年にNHK放送80周年を記念して放送されたドラマ『ハルとナツ～届かなかった手紙～』の撮影などで使われた。

●日伯関係の歴史
1942　第二次世界大戦開戦
　　ブラジルと国交断絶
　　日系人20万人が敵性人となった。
1945　敗戦。現地の日系人は、日本が負けたと信じられなかった。

日本人は多くの日系人に感謝しなければならない。戦後日本は家もない、食べるものもない生活になってしまった。海外に暮らす日系人の方々がお金を集め、日本にミルクや缶詰などを送ってくれた

（LARA（ララ）物資）。この物資のおかげで、日本の学校給食が始まった。

（3）ラチーノ学院生徒によるファミリーヒストリーの発表

○１人目

事の始まりは戦争が始まったとき。初代（高祖父）がボリビア（ラパス）に渡ったときに、キヨシヤマモトという子どもがいた（のちの祖父）。もう一人の子どもが生まれて、妻（高祖母）が亡くなった。その後、コチャバンバ州に移住し子どもたちも現地の方と結婚した。1977年サンタクルス州に移住し、祖父は祖母と結婚。2009年に祖母が亡くなり、翌年に祖父が亡くなった。今回、自身のルーツを調べて初代が鹿児島の出身だと分かった。父母が2006年に、妹と自分が2021年に来日したばかりで、今は日本の生活を楽しんでいる。

○２人目

曽祖父は沖縄出身。16歳の時に仕事がなくブラジルに行ってコーヒー農場で働いたそう。子どもが５人いて、ずっとサンパウロの中にいた。祖父母が結婚し、母が生まれた。はじめは、祖父母だけ日本に来て、母が大学に行けるようブラジルに仕送りしていた。母は、日本の工場で父と出会い、私が生まれた。ラチーノ学院には２年生に妹もいる。

○３人目

初代は佐賀からの移住者。曽祖父はお金がなく、ブラジル（サンパウロ）に行ったそう。マットグロッソ州のコーヒー農園で社長になりお金ができたが、ギャンブルなどでなくなってしまった。祖父の名前が書いてある道があるほど有名だったようだ。その後、差別を受け、サンパウロから逃げてきた。祖父の代わりに父が来日し、日本で母と出会って今に至っている。

（4）問いかけ「自分はブラジル人か日本人か？どちらだと思う？」

ラチーノ学院の生徒に問いかけた。「ブラジルorボリビアの空港におりて街を見て回ったときに、自分は何人だと感じるか？」

⇒全員が「自分はブラジル人」と回答。

○通訳Ａさんのヒストリー

23歳の時に来日し、今40歳。大学も仕事もペルーでしてきた。10年間、病院で通訳をしたりしている。長くペルーに住んでいたのでサッカーはペルー代表を応援する。自分の子どもたちは日本生まれ育ちなので、日本を応援するかもしれない。妻は日系ブラジル人。

○通訳Ｂさんのヒストリー

コロンビアで生まれ、４か月で来日。ブラジルの保育園でポルトガル語を覚えた。４歳からバイリンガル。日本の高校を卒業して、進路を考える時に分野を決められず、市役所で働いた。その後、専門学校、大学に行き、現在は研究職に進んでいる。言語は文化的な面も学ぶことができる。

○通訳Ｃさんのヒストリー

きょうだいの中で自分だけがブラジルで生まれた。父が日本領事館に出生届を出していなかったため、家族の中で自分だけがブラジル国籍である。来日の際は、ブラジルからは逃げてくるような感覚だっ

た（今良くなったにもかかわらず、そのような感覚で来日する人もいる）。日本人と結婚して、子どもも生まれ10年間東京に住んでいた。東京ではブラジルのコミュニティは少ない。外国ルーツの人たちのために何とかしたい、子どもを助けたいという想いがあり、市役所で働くことになった。

川﨑さんより、「今回のようにブラジルの若者と日本人が直接深く関わるのは初めてではないか。とても貴重な経験であったと思う。ラチーノの人たちにこの経験をどう生かすか、ぜひ話してあげてほしい」とコメントがあった。

感想

私自身も外国人として、異なる文化的規範、言語、そして期待に囲まれた世界に身を置くという感覚に共感できる。しかし、私が話をした生徒の多くは、日本で生まれたか、幼い頃から日本で育っていた。にもかかわらず、生徒たちの多くは、自分がブラジル人なのか日本人なのかはっきりしない。生徒たちの日本に対する意見はとても率直で、過度に肯定的でも批判的でもないと感じた。日本での経験の良い面も悪い面も聞くことができ、とても興味深かったし、日系人の日本での経験がより良いものになるよう、少しでも貢献したいと思った。　（ハモンド　エミリー）

≪教室②≫

ファシリテーター：川辺　純子さん　Glocal net Shiga

概要

ブラジルに今も残る日本式の建造物の写真から、ブラジルと日本の繋がりを知る。日本から出稼ぎのためにブラジルに渡った日本人の祖先をもつ日系人の募金により、戦後困窮していた日本へ「ララ物質」が送られたことを学んだ。後半は、３名の日系ブラジル人生徒より、自身のルーツに関するスピーチ発表を聞き、その後グループごとに質問などをして交流した。日本に来て31年目になる酒井さんからも、親族がどのようにしてブラジルに渡ったのか詳しく説明していただいた。

（１）「ひょうたん島問題」より　～あいさつがわからない～

１人１枚ずつカードを配り、そこに書かれている通りに挨拶をして教室内をまわる。全体の中に３つの種類の挨拶が存在し、挨拶をすると同じように返してもらう場合と返してもらえない場合を体験する。活動後に、ふり返りを行い、参加者からは「同じ挨拶だと安心した」や「挨拶を返してもらえないと不安な気持ちになった」と言う感想が出た。自分と異なる文化を持つ集団に入り込むとはどういうことかについて体験した。

（２）日系人の歴史を知ろう

①どっちがブラジル？日本？

いくつかの写真を用いてクイズを行った。一つ目は、日本とサンパウロの日系校の学生が書いた作文。二つ目は、玄宮園とイビラプエラ公園。三つ目は、生田神社とリベルダーデ（サンパウロにある東洋人街）。非常に似通った建物が、日本の反対側に位置するブラジルに存在する事実を知った。

②アニメ動画「100年前のブラジルへ、タイムスリップ！～アニメで学ぼう　移民の歴史～」鑑賞

③LARA（ララ）物資について

第二次世界大戦後、中南米の日系社会による募金をきっかけに、アメリカのアジア救済公認団体（LARA）を通じて日本に送られた支援物資について説明があった。当時の価値として約400億円。当時の日本人の６人に１人が恩恵を受け、学校給食の礎にもなったことを知った。

昼食休憩

④ブラジル人生徒によるファミリーヒストリーのスピーチ

○１人目

祖先が、1918年戦争から逃れるためにブラジルに辿り着いたそう。彼女自身は日系人の父とブラジル人の母をもつ。自分のアイデンティティについて、ブラジル人と認識しているが、理由ははっきりわからないという話があった。また、将来について、日本社会に自分がどのように入っていくのか、順応できるのかという不安も聞かせていただいた。

○２人目

曽祖父は、1929年世界恐慌の頃にブラジルのサンパウロに移住したそう。農場での仕事や日本語教師、工場での仕事をする中で曽祖母と出会う。そして、彼の母が19歳の頃、ブラジルでのインフレーションの影響で、1991年に生きるために日本へ移住した。彼自身は４歳からラチーノ学院に通っており、日本で生まれたブラジル人というルーツを持つ。現在は外国語大学への進学を目標にしていて、今後も日本で暮らしたいという思いがある。

○３人目

曽祖父は、第一次世界大戦後、仕事が見つからずブラジルへ渡ったそう。その後、ブラジル人との間に彼の父が生まれた。父は1991年に日本に渡り、彼の母と出会う。両親共に日本の工場で働いた後、ブラジルに渡りビジネスを始めたが上手くいかず、2017年に日本に戻ってきた。彼は移り住む大変さについて、言語の壁と環境の変化は大きいと話した。また、ブラジル人とは５分で友達になれるのに対し、日本人とはそううまくいかないと感じていると話してくれた。彼自身のアイデンティティについては、フレンドリーな国民性があることから、ブラジル人と認識しているそうだ。

⑤ゲストスピーカー　酒井さんによるファミリーヒストリー発表

1920年代、滋賀県から約2000人の移民がブラジルに渡ったそう。移民船の乗船記録は誰でも調べることができ、彼女の祖父母がどの船でブラジルに渡ったのか詳しく説明してくださった。彼女が昔暮らしていたマットグロッソ州についてや、現地の日系協会ではこんにゃく作りや肉まん作りなどが行われていることを教えていただいた。

⑥グループディスカッション

グループに分かれて、ファミリーヒストリーの話者から直接お話を聞き、日系ブラジル人としての生き方への理解を深める。

その後、各グループの話し合いから出た意見について、クラス全体で共有する。

（３）まとめ

日本の考え方は血統主義。川辺さんより、「日本人の血が入っていた方が良いのか？」との問題提起があり、以下の２点について問いかけがあった。

課題

日本人と日系ブラジル人が繋がり、幸せに生きられる社会にしていくために、次世代を担う私たちにできることを考える。

- どうしたらもっと力を合わせられるのか。
- 100年後お互いの子孫が幸せに生きるためには。

感想

日本とブラジルという異文化の間で板挟みになりながらも、自分自身のアイデンティティはブラジル人として生きることにあるとクラス全員の生徒が答えていた。日系ブラジル人と日本人、互いの存在を意識しつつも理解し合うための機会が不十分であることに気がついた。彼らにとって生きやすい日本社会をつくるため、相互理解を促すためにも、初等教育の段階から日本とブラジルの関係性について歴史を学ぶ必要がある。

午後の活動を通して、お互いに話し合うこと、言葉とジェスチャーを通して意思疎通することによって、互いの偏見を超えて、それぞれの境遇や個性を理解し、共感し合う体験ができた。日本の血統主義について考える時間があった。日本国籍を有して21年生きてきた私は、今まで日本国の血統主義について意識的に問題視したことはなかった。しかし、講義のお話を通して、日本人の血が入っているか否かで、外国籍の人が日本国で受けられる待遇が大きく変わってくることを知り、不公平な社会の仕組みだと感じた。

このように、異文化のフィルターを通してこそ、違う視点から自国の主義と文化を知ることができる。なぜ日本が血統を重視する社会であるのか、血統主義を裏付ける理由は現代の価値観と共存できるものであるのかを考え、私たちの世代から変化を起こしていきたい。　（新山　晴日）

感想

日系人について詳しく知らなかったが、私たちの祖先の代が生きていく・お金を稼ぐために「移住」という手段をとったことが始まりだと知った。また、移住した先で日本風の建造物を建てることを認められ、今もなお残っていることに驚いた。一方、日本に移民としてやってきた外国人に対して、日本が同じようにその国の文化に関係する建造物を建てることを認めているのか気になった。例で挙げると、イスラム教のモスクを設立するにも相当の努力があったと聞いているので他文化に対して、日本はまだまだ受け入れ体制が整っていないように感じた。

また、ラチーノ学院の生徒が「あなたは何人ですか？」という質問に対して、おそらく全員が「ブラジル人」と答えたことに驚いた。日本で生まれ、日本語を学び、日本で育っているにも関わらず、そう返答したのは、ラチーノ学院に通っているからこそ戸惑いなくそう答えられるのだと考えた。ラチーノ学院のような外国人学校は「自分自身が何者であるのか？」を信じられる、唯一自分のルーツの文化を学べる場所であるため、今後も守っていかなければならないと感じた。

（昨年度修了生／サポーター　竹辺　このみ）

セミナー参加者のみでのふりかえり

ラチーノ学院の生徒は下校し、セミナー参加者が同じ教室に集合して、本日のふりかえりを行った。感想などを付箋に書きだし、模造紙に貼り付ける作業を行い、全体共有した。

- アイデンティティの話で国籍とは何なのか疑問に思った。
- 元気で明るい人が多かった。
- お昼のポテトチップス（炊いたお米の上にかけた）にはびっくりした。
- 日本での生きづらさを聞くことができた。
- いろいろなバックグラウンドを持っている人が多い中で、自分は何人か？私たちも考えていかないといけない。
- このような背景を持った子どもたちが増えていく。どのような社会を作っていけるのか課題になってくる。
- 日本での生きにくさはなく、楽しんでいる生徒が多かったが、一方で、冷たいという印象を持つ生徒もいた。
- 日本人とそれ以外の人たちの壁を作っているのかもと思った。
- アイデンティティの揺らぎ。どう接するのか。
- 日本好きな子が多かったが、日本社会に出ていく中で思う困り感、不安などあるのではないか。

- 日本ルーツの方々のことを日本に住みながら知らなかった。
- ３世、４世の子どもたち、子孫が安心して暮らせるように考えていく必要がある。
- 国籍は全員ブラジル人だと答えた。ブラジルを誇りに思っている子どもが多かった
- もっとバレーボールをやりたいと、実際に交渉していた様子に、育ってきた環境の違いを感じた。食の違いについても同様。

まとめ　ファシリテーター　川﨑さんより

○日系ブラジル移民の歴史等について紹介

- バネスパ（元サンパウロ州立銀行）には多くの日系人が働いている。日系人は現地で親切で勤勉という評価を得ていることが表れている。
- 国籍を中心に話していくと日系ブラジルは非常に複雑である。

[変容モデル]

ブラジルにいるときは日本人と言われる。
日本人にはブラジル人だと言われる
→　日系人はどちらなのか？
　アイデンティティを形成する青年期に混乱してしまう人がいる。

- ラチーノに通っている子どもたちは、日本人の友達は少ない。
- 市町の国際協会で対応しているのは日本の学校に通っている子どもたちがほとんど。
- 世代が進むにつれ、いつの間にか日本社会に適応し、アイデンティティが日本人になっていっている。
- 家族で来日するの人たちが増えていく（法律を変えている）。
- どのような教育で付き合い方をしていくのか、考えていく必要がある。
- 現在、日本で暮らす日系ブラジル人は、定住者：永住者の割合は１：２で永住者が多い。つまり、家族でずっと日本に住んでいく人が多いという実態である。

第３回　「ムスリム（イスラム教徒）との出会い」

【開催日時】2023年９月10日（土）
【参加者数】受講生：13人　サポーター：８人
【会　　場】モスク アン ヌール能登川（MASJID AN-NUR NOTOGAWA）
【ファシリテーター】川﨑　功さん　Glocal net Shiga
【訪問先の説明】

滋賀県東近江市内にある３階建ての家。家といっても小さな公民館くらいの広さがあった。毎月そこにイスラム教の人々が集まり、お話をしたり祈りを捧げたりしているそうである。そこに集まる人数はとても多いらしく、男性は２階でお祈りが行われるのだが、ぎゅうぎゅうになってしまう程だそうだ。日本語が喋れる方も多くいるが、英語のみ喋れるという方もおられ、いろいろなムスリムの方が集っている印象だった。

実際にモスクで先生と呼ばれる方から、自分たちがどのように生活しているのかなどのお話を聞いた。その後、手や足、顔を水で清めたり、イスラムのお祈りをしている所を見せてもらったり、伝統料理である辛い物や麺類などの様々なお料理と、辛い物が苦手な人の為に用意されたみかんを食べさせてもらった。さらに、これらの体験を通して疑問に思ったことを聞き、どうやって生計を立てているのかといった話もさせてもらった。そして、モスクの人々といったん分かれて受講生だけで集まり、グループに分かれて感想を紙に書いたり話し合った。

最後にモスクの人々にチームの代表が感想を述べて感謝の礼をして終了した。

（１）技能実習生について学習

技能実習生制度とは、日本が技能、技術、知識の開発途上国等への移転を図り、開発途上国等の経済発展を担う「人づくり」に協力することを目的としている制度。在留インドネシア人のうち技能実習の在留資格を持つ人は、全国で約46％、滋賀県では約62％を占めている。

（２）モスク設立の経緯について学習

（講師：モハマッドさん（一社）滋賀インドネシア友好協会 代表理事）

モハマッド ヌズライさんは、1997年から３年間、研修生として製造業に従事。インドネシア帰国後は、日本語学校や送り出し機関にて技能実習生のサポートを行う。日本人との結婚を機に日本へ定住。インドネシアにはモスクがあちらこちらにあるが、滋賀県には草津市の一か所しかなかった。ヌズライさんは約１年間寄付金を募り、地域住民の許可も得て、東近江市で設立した。今ではイスラム教徒の憩いの場となっている。

（３）イスラム教について学習

（講師：アマドムアズさん）

①インドネシアにおけるイスラム教：インドネシアではイスラム教が86.7％を占めており、イスラム教徒が多い国の一つである。

②イスラム教の教え：六信五行「６つの信じるべきこと」と「５つの行うべきこと」

《六信》

『神』唯一神アッラーの存在を信仰。

『天使』アッラーの命令を人間に実行させ、善行と悪行をチェックする天使を信仰。

『啓典』コーラン（クルアーン）こそが神が与えた最後で最高の言葉として信仰。
『預言者』神の言葉（啓示）を預かり、人々に伝える人のこと。最後で最も偉大な預言者としてムハンマドを信仰。
『来世』現世は仮の世界であり、来世こそ本当の人生（永遠の生）。来世には天国と地獄があり、最後の審判で生前の善行が多い人は天国へ、悪行が多い人は地獄へ行く。
『天命』善悪を含むすべての事柄は神の意志による運命であると信仰。
《五行》
『信仰告白』信心を宣言し、アッラーのほかに神はなく、ムハンマドは神の使徒であることを認めること。
『礼拝』１日に５回（夜明け/正午/午後/日没/夜）メッカに向かって礼拝。
『断食』ラマダンの聖なる１ヶ月間、夜明けから日没までの間飲食を断ち心身を清める。
『喜捨』余裕のある者は貧しい人に一定の割合で富の分配を行う。
『巡礼』人生に一度イスラム歴12月にメッカへの巡礼が義務。

（４）お清め・礼拝の見学・体験、昼食

①お清めの方法：「ビスミッラー」と唱える→手を洗う→口を３回ゆすぐ→鼻を３回ゆすぐ→顔全体を３回洗う→肘まで両腕洗う→頭を水で撫でる→耳を洗う→両足くるぶしまで洗う
②礼拝の意味：（ⅰ）起床後：起きたことに感謝（ⅱ）昼：午前の振り返りと神へ感謝（ⅲ）夕方：無事に仕事を終えられることに感謝（ⅳ）夜：無事に１日を終え家族に会える感謝（ⅴ）就寝前：一日の振り返り、一日のすべてに感謝

③礼拝の見学・体験：実際に礼拝の様子を見学、希望者はアザーンに合わせて体験。

④昼食：イスラム教徒の皆さんが振る舞われるインドネシア料理をいただく。

感想
実際にモスクで直接お話を伺うことで、イスラム教徒にとって信仰が人生や生活と深く結びついていることを感じた。イスラム教との共通点からキリスト教の受講生と握手するシーンが生まれたのも印象的だった。強い信仰をもたない人が多い日本において、宗教やそれに深く関わる文化、習慣をどう理解して互いに住みよい環境をどう創造していくか、今後共通の課題として共に取り組んでいく必要があると実感した。　（村長　りか）

（５）インタビュー交流

男性信者へのインタビュー①

祈りをしている時にモスクの人は何を考えて行っているのかが分からなかったのでお聞きした。すると「自分の生活で犯してししまった罪を神に許してもらっている。罪というのは、結婚しているのに（妻以外の）女の人を見て美しいと思ってしまう事とか社会的にダメなのにやってしまった事ね。」という事だそう。ムスリムの人は本当に真面目なんだなぁと思わされた。

感想
事前情報としてなんとなくあったムスリムの人々にある偏見（男女差別、頭が固い）などの物は西洋的史観である事を、頭の片隅に入れて忘れてからムスリムの方々と色々交流をした。それで、やはりムスリムの方々はイスラムの考え方を基に世の中を一生懸命生きているのだと思わされた。そ

こにはムスリムの方々の誇りと勤勉さを強く見せてもらったように思う。

私のような西側の新しい意見ばかり学習し模範として言われてきた人間にとっては全くもって新しい、知らない価値観の方々であり非常に興味深いお話をしてもらえた。特に「女の人はお姫様だ」という話を真剣に丁寧に教えてもらったときは思わず驚きと尊敬の念を抱かずにはいられなかった。そこには建前というような雰囲気は一切なく、「これこそが私たちの美徳です」と心で伝えようとしているのが分かるし、実際にちゃんとその通りに生きている、生きようとしているのがよく伝わった。そこにはなんとなく騎士道精神のような熱さを感じずにはいられず、現代にもこのような方々がいらっしゃる事実に感嘆の念を持ったのは間違いなかった。

今回の交流から学んだこととしては自分には少ない信条や情熱のようなものを強く持っている人々であり、尊敬できる方々だと思った。そこからムスリムの方々から学んだことの一つである、自分の性分として女性はお姫様と考えて生きる事を真似すると決意した。　（相馬　大耀）

男性信者へのインタビュー②

○対象者：ヒムロンさん（40代）

Q：日本に住むようになったきっかけは何ですか？

A：バリ島で日本人女性と出会い、結婚・日本に在住することを決めました。

Q：お子さんはいらっしゃいますか？

A：います。今年18歳です。幼少期～中学生まで、インターナショナルスクールに通わせていました。どこでも通用する国際人材になってほしいです。

Q：日本での生活はどうですか？

A：慣れましたし、問題ないですね。強いて言うなら、仕事中にお祈りができないときがあることですね。ムスリムにとって、お祈りが出来ないことは苦痛なのです。日本のイメージは来る前と来た後でとても変わりました。バリで仕事していたとき、日本人のお客さんは皆さん、すごいお金を使うんですよ。お金持ちの人ばっかりなんだなと思っていたんですけど、実際そういう訳でもないことが分かりました。

○対象者：スラメットさん（40代）

Q：日本に住むようになったきっかけは何ですか？

A：研修生（現：技能実習生）です。南草津の機械加工の会社で勤務していました。その研修中、今の妻（日本人）と出会いまして、在住を決めました。

Q：研修期間中、日本語はどのように勉強されていたのですか？

A：メモを手元から離しませんでした。何もわからなかったので、分からないときは直ぐにメモをとって、仕事が終わったらまとめて会社の人に質問をしていました。そして、帰ってその日の単語の復習をしていました。それを毎日していました。

Q：お子さんはいらっしゃいますか？

A：います。17歳と１歳半と４ヶ月の３人です。17歳は長女で今京都の高校に通っています。

Q：日本での生活はどうですか？

A：大丈夫ですね。不便なこともないです。

感想

御二方へのインタビューを通して、日本での生活に上手く馴染めているように感じた。しかし、それと同時に我々日本人の認識も変えていかなければならないと考えた。ヒムロンさんの「仕事中にお祈りができないときがある」という言葉が気になったのだ。想見ではあるが、日本人には「仕事中はお祈りをしない」という潜在的なステレオタイプがあるのではないだろうか。前記に関しては、一概に断定できないが、多文化・多国籍の人々と共生するには、日本人それぞれが持つ固定観念なるものを取り除き、日本人側もインドネシア人に対しての歩み寄りが必要なのではないかと考えさせられた。　（永　潤）

女性信者へのインタビュー①

○対象者：ユニーさん（インドネシア出身/40代女性/二児の母）

Q：お昼ご飯美味しかったです。家でも料理はしますか？

A：します。旦那用、子ども達と自分用を分けて作ります。旦那は日本人で、辛い物がお腹に合わず食べられないので日本料理、子ども達は私と

一緒のインドネシア料理を食べます。料理を分けて作らないといけないのは、ちょっと面倒くさいよね（笑）

Q：お仕事をしに日本に来られたのですか？

A：はい。実習生としてホテルで仕事をしました。帰国２ヶ月前に今の旦那さんと出会い、「また日本に戻ってきてほしい」と言われました。インドネシアへ帰国後、親への挨拶やビザの手続きをして日本に戻り、今の旦那さんと結婚しました。

Q：お子さんはおいくつですか？

A：娘が２人、大学生と中学生です。２人ともインドネシアで生まれ、日本で育ちました。日本語が第一言語です。私はインドネシア語を忘れてほしくないので、家ではインドネシア語で話し、電話やLINEもインドネシア語を使います。長女は、通信制大学に通い、スーパーと日本語を実習生に教えるアルバイトをしています。アルバイトを通してインドネシア語を勉強してもらえるのでよかったです。ここ（モスク）で実習生の通訳サポートができるようになったら嬉しいです。小学校からは、ヒジャヴを外しました。私にとっては頑張った（耐えた）ことです。

Q：やはり、子どもさんがヒジャヴを外すことは精神的に苦しかったですか？

A：正直辛かったです。でも、子ども達は学校でヒジャヴを身に着けることを嫌がるので、仕方がないから我慢しました。ただ、日本人の友達の真似をして肌をたくさん見せるような服は着ないように約束しました。それと、お祈りや豚肉などを食べないこと、その気持ちを大切に守るように話しました。

Q：学校でお祈りはどうしていましたか？

A：女の子は、人に見られるところでお祈りができないです。だから、先生が空いている教室を使わせてくれました。

Q：学校だと給食がありますが、どうしていましたか？

A：幼稚園の時から、給食のメニューをチェックして、初めは先生に「これは食べられないので外してください、お金はそのままで構いませんので」とお願いしました。食べられないものが多い日は、弁当やおかずだけ持たせていました。他の友達が「ずるい」と言っていたときもありましたが、今は理解して給食や修学旅行先での食事のときには「これは豚肉が入っているから食べられないよ」とサポートしてくれるようになりました。

Q：外食の時はどうしていますか？

A：子ども達がネットでお店を検索して、私が「これは豚肉入っていますか？」と店員さんに聞いています。子ども達は「恥ずかしいからやめて」と言いますが、「食べたいんでしょ？（＝食べるためにはきちんと確認しないといけない）」と、確認するようにしています。でも大体食べられるのは、寿司かうどんくらいです（笑）

感想

上記の通り、厳格なイスラム教徒の母親としてイスラム教の教えやインドネシアの言語や文化を我が子に受け継ぎ守りたい気持ち、日本人として宗教について理解はできるが食事やお祈りなどの習慣は変え難い現実、子ども達の「母の想い」は大切にしたいものの実際に日本で生活するには理解されず馴染めない苦しみなどがインタビューにより露わになった。それらより、日本人や親子間でのギャップに苦しみ、葛藤しながらも、お互いの想いを尊重しあい、できることを掛け合わせて歩み寄ることが大切であると改めて感じることができた。（村長　りか）

女性信者へのインタビュー②

２歳半のお子さんを育てる女性にお話を伺った。

①インドネシアの学校事情（英語教育と宗教の時間）

インドネシアは約13,000の島々からできた島国であり、様々な民族が暮らしている。島により

宗教や言語も異なるため、異なる島の方と会話する際は共通語であるインドネシア語で会話をするとのこと。地理的にもオーストラリアをはじめ、様々な国に近いため小学校１年生に相当する学年から英語教育が始まるそうだ。人口の10～20％は英語が話せるとのこと。また高校まで週１回宗教の科目の時間があり、各宗教に分かれて宗教の授業を受けるそうだ。

②インドネシアの法律（結婚、アイデンティティカード）

インドネシアで婚姻する際は夫婦同一宗教でないといけないと法律で決まっているため、どちらかが非ムスリムの場合、改宗する必要があるとのことだ。インドネシア以外の国での婚姻の際はムスリムと非ムスリム同士でも問題ないとのことだった。また、アイデンティティカードがあり、自身の宗教を記載する義務があるとのことだ。

③イスラムの信仰に関して

礼拝前の水でのお浄めだが、水は流れるきれいな水（水道水や川）ならばお湯でも構わないとのことだ。水をはじくものは禁忌とされ、タトゥー禁止、メイクも礼拝前は落とし、礼拝後は再度メイクをするとのことだった。また、日本には四季があるため冬の礼拝は日の出の前に行う際は体が冷えて厳しいとのことだ。日本での寺社仏閣に関しては見学のみは可能、参拝は他の神様や仏様とつながるため不可とのことだった。お守りも信仰の対象として認識しなければ持つことは可とのことで、アッラーへの信仰心が一番大切、とのことだった。

女性信者へのインタビュー③

食事への配慮、お祈りの回数、家族との関係など、日本の暮らしの中でのイスラム教について話を聞いた。

感想

イスラム教と聞くと、戒律などがたくさんあり厳しいイメージが強かったが、イスラム教の教えや実際にムスリム・ムスリマのお話を聞くことで、平和で人に優しい宗教であることがよく分かった。コーランに記載されている一文一文にも深い意味が込められていて、ラマダンや喜捨などもすべてに意味があり、人への思いやりに溢れた、良い教えがたくさんあることが分かり、大変で厳しいというだけでなく、本来の行為の意味を考えると、人として大切なことを教えてくれるものだと感じた。

毎日５回のお祈りや豚肉やお酒の禁止等、日本人からすると大変と思うようなことも、意味があるためやっていると話されていて、イスラムの教えをしっかり理解されているからこそ、苦とは思わずにされていると感じた。インタビューしたムスリマは、イスラムの教えの中で、本当にやらないといけないの？と思ったことはあるが、神様が私たちをそうさせているということには意味があるし、その意味が分からない場合は、周りのイスラム教に詳しい人に聞くと話されていて、すごく熱心であると思った。

そうしたお祈りをする場所やムスリム・ムスリマのコミュニティとして、滋賀にモスクがあり、集える場所があることはとても貴重であり、大事な空間であることが分かった。イスラム教徒の人口は多く、滋賀県でも増えている中で、拠点となるモスクがあることは大きな意義があり、その町の日本人にも受け入れられていることは、お互いへの理解が深まるきっかけとなり、良いことだと感じる。一方で、日本で生活する中で、ムスリム・ムスリマたちは、食事や学校の給食、お祈りの習慣など、周りの理解が不足していることが大変と話されていて、日本で困難を感じる場面について直接お話を聞くことで、よりイスラムへの理解が進み、配慮が足りていない部分に目を向けることができた。

日本の学校に通う子にも実際に話を聞くことができ、給食に豚肉が入っていると食べられないことや、代わりに自分だけお弁当を持って行くことも、自分だけ目立ってしまって嫌という現実的な悩みを聞くこともでき、当事者からの声をもとにした配慮が、今後より必要になってくると感じた。また、イスラムの過激集団によるテロや殺人が行われ、世界に恐怖を感じさせる事件があるが、インタビューしたムスリマは、「私たちも同じよう

に怖い。コーランにはそのようなことは一切書いていない。」と話していたことが印象に残った。本来のイスラム教は人に優しい平和な宗教観であり、イスラムの教えの意図など、大切にしている考えが、多くの日本人に適切に伝わるべきだと改めて感じた。

皆が暮らしやすい多文化共生社会を実現していくためには、まずはよく知ることが大切であり、お互いへの理解から始まると思う。（本間　有紀）

（6）参加者同士でシェアリング

インタビューの内容をまとめ、屋台発表（ワールドカフェ）形式で共有。

他のグループでどのような話が出たのか、シェアを行った。男性目線、女性目線の意見があり、ムスリム・ムスリマの考え方に触れることができた。

①質疑応答インタビューの内容のまとめ

グループメンバーにて聞き取った内容を再度確認、付箋に記入後、模造紙に貼り屋台発表の準備を行った。

②屋台発表（ワールドカフェ）

各グループのメンバーが順番に他のグループを回り、他のグループが聞き取った内容を教え合い、情報共有を行った。

（7）感想共有、ファシリテーター川﨑　功さんによるまとめ、ヌズライさんから一言

①感想共有

各グループの代表者が感想を発表。屋台発表で得た他グループの情報の感想や一日を通じての感想、イスラム教とキリスト教の共通点等、それぞれ思い思い発表した。

②川﨑 功さんによるまとめ、ヌズライさんより一言

川﨑さんより今後のムスリムを題材とした絵本づくりの提案、ムスリムの若者と滋賀の高校生の交流の機会の展望、参加者の周りの人々へ今回の学びを広めていく必要性のお話、ヌズライさんより長年の疑問であった、日本人との距離の取り方（連絡先交換）についてのお話もあった。

感想

遠い存在だったイスラム教やムスリムの方々でしたが、イスラム教の習慣や禁忌事項、その理由等も知ることができ、身近に感じました。またムスリムの方の熱い信仰心に心を打たれました。改めて正しく知る重要性を感じた一日でした。

（岡谷　ともみ）

第４回「日本に根付く朝鮮半島の歴史と今との出会い」

【開催日時】2023年10月14日（土）
【参加者数】受講生：15人　サポーター：８人

≪午前≫　滋賀朝鮮初級学校にて授業見学および鄭　想根さんからのお話
【会　　場】滋賀朝鮮初級学校
【講　　師】滋賀朝鮮学園・理事長　鄭　想根さん

内容

（１）鄭理事長からのお話１

［滋賀朝鮮初級学校の概要］

創立62年の歴史があり、園児～小学校６年生までが在籍している。終戦後（1945年８月15日以降）、滋賀県に住む在日朝鮮人の子どもたちの教育と人権を守り育んできた。その過程で朝鮮学校強制閉鎖（1949年）もあったが、1950年からは「朝鮮初級」がつくられ、1960年にはそれらが順次に発展統合してきた。教育カリキュラムは、日本のカリキュラムに朝鮮のカリキュラムが加わったものとなっている。

（２）授業風景の見学

校内を自由に見学する時間をいただいた。学校の雰囲気は日本の小学校と同じような雰囲気で、学級目標や学級通信、児童が作成したポスターや習字の作品が廊下や教室の壁に掲示されていた。１つの教室に１人～３人の生徒が先生と授業を受けており、真剣な表情で教科書を音読したり、黒板に書いてある算数の問題を考えて解いたりしていた姿が印象的であった。あるクラスで先生と一対一で授業を受けている男の子と話をしたが、彼はハングルと日本語、英語を学んでいるといい、さらに得意のボイスパーカッションも披露してくれた。

（３）朝鮮の踊り、打楽器演奏

生徒たちが朝鮮舞踊と打楽器演奏を披露してくれた。色鮮やかなオレンジと黄色の衣装を着た女の子たちは笑顔で踊っていて、キラキラと輝いていて、見ていて自然と笑みがこぼれた。男の子たちはチャンゴやケンガリ、チン、プッと呼ばれる打楽器を使って、演奏者３人ともアイコンタクトをとりながら、身体をリズムに合わせて揺らしていて、とても感動した演奏だった。みんな恥じらうことなく、自信や誇りをもって踊ったり演奏したりしていた。

（４）鄭理事長からのお話２

［近代史、ヘイトスピーチ］

滋賀県と朝鮮との歴史的なつながりを学んだ。戦争時、朝鮮半島から滋賀県へ強制労働が行われ、多くの朝鮮人は炭鉱などで従事した。自力で帰ろうと思っても、朝鮮総督府（日本）が母国の土地を収奪しているため結局自由でなかったり、戦後は日本での滞在期間が長かったため故郷に生活基盤がなかったり、政治が不安定であったりして帰れなかったという。また、普段知る機会が少ないヘイトスピーチについても、実際に動画を視聴して事実を知ると共に、悲しい気持ちになった。その罵詈雑言（ばりぞうごん）や禍々（まがまが）しい感情を自分に向けられたりぶつけられたりしたらどう思う？同じ日本人、人間としてすごく恥ずかしかった。それだけでなく目に見えない差別のようなものもあると知った。朝鮮学校は日本の学校教育法

に当てはまらないため、授業の無償化、給食への支援が乏しいなど、法においても「差」が見える。しかし、学校周辺の地域と人たちと昼食をつくったり、イベントを行ったりなど、地域の人と学校がウリハッキョ（わたしたちの学校）をつくっているという希望のような事実もある。

感想

普段の生活の中では知れなかったこと・感じたことを体験した。印象に残っているのが、教室に38度線が引かれていない朝鮮半島のマップである。何故？鄭さんは「もともと朝鮮は一つであるが、大国が家族を分断し、互いを戦争させた。子どもたちは『希望』である。将来、またひとつになるように」という想いを話した。私はその言葉にハッとさせられた。朝鮮という地域に生きてきた人々は、外部に振り回され、自分が持つ文化の尊厳を無視され、同じ民族・言語・文化を持つのに「韓国」「北朝鮮」と区切られ、その区分は強化されている。日本に住む私もそうだ。ニュースを見て、まるで「韓国」と「北朝鮮」は互いにライバルかのように思っていた。しかしそれは、米国や中国といった大国の目線と同じように重ねてみているからではないか。また、ヘイトスピーチや偏見・差別は、文化に優劣をつけて認識しているから「自分が正しい」「あいつは異質、排除すべき」という意識が生まれるのだと思った。

鄭さんは最後に「二度とこのような悲しい過去を繰り返してはならない。そのためには正しい過去を知り（特に飛ばされがちな「近現代」の歴史）、差別と排除の構造を壊していく責任が今の私たちにある」と話してくださった。私はその責任を全うしたい。そしてグローバル化が進む今、将来日本の中はどんどん多文化になっていくだろう。自分と異なる文化を「面白い」「楽しい」と感じる人もいれば「怖い」と感じる人もきっといるだろう。お互いを知ることができるイベントや場所、しかけなどの機会を通して、互いを理解し、「違う」ことに対しての恐れや心配を越えて、「一緒に同じ地域に住むもん同士よろしくね」と交流できる地域を、地域の人たちで構築していきたいと強く思った。（是永　弥里）

≪午後≫

【会場】渡来人歴史館

専門員の大澤　重人さんによる講義および渡来人歴史館内展示ガイドツアー

（1）日本の朝鮮植民地統治

植民地統治下の在日朝鮮人数は790人（1909年）から2,360,000人（1945年）へと推移した。日本に来た理由は、労働者動員や朝鮮での生活の困窮である。日本に来た朝鮮人は、国籍は日本、戸籍は朝鮮となり、日本人でありながら日本人でない扱いを受けた。日本にとって終戦記念日である1945年８月15日は、朝鮮にとっては統治から解放された日であり、祝日である。

（2）敗戦後の在日朝鮮人

日本の敗戦後、在日朝鮮人は故郷へ帰ろうとした。敗戦時200万人以上いた在日朝鮮人は1946年末には約56万人に減少している。そんな中でも、故郷に帰りたくても帰れない人々がいた。その理由は、故郷に生活基盤が無いことや故郷の物価が高いことである。

（3）館内展示見学

古代から近現代の日本と朝鮮の歴史に関する展示を見学した。渡来人が農業の技術や生活の文化などさまざまなものを日本にもたらした。その中でも、日本の生活に適したものが根付いていった。例えば、かまどは根付いたが、オンドルは根付かなかった。

感想

日本と朝鮮の歴史は、学生時代の歴史の教科で学んだことがあったが、今回の研修を通して新たなことを知った。特に、日本にとっては負の歴史である、日本が過去にしてきた酷い行いは、これまで知ることがなかった。しかし、今回違った視点から歴史を学ぶことで知ることができた。物事を違った視点から見ることの大切さを強く感じた。過去の出来事を知り、差別や排除が起きないようにするには、何をするべきなのか、どのような考えを持つべきなのかを私たちはこれから考えて行動していくべきだと感じた。（堀井　涼花）

≪一日のふりかえり≫

【会場】ピアザ淡海

朝鮮半島の歴史について出会い、学んだふりかえり、グループごとの発表

（1）朝鮮学校での出会いについて

- 生徒数が少ない
- どんな人が先生になるのか
- 入学は親の意向か子どもの意思か
- 卒業後の進路は
- 地域との関わり、交流が確立できていそうだった
- 年間行事が多かった
- 校内に保育室も併設されていた
- 生徒たちがとても明るかった
- 選挙権がないのに日本の立憲などの勉強しているが子どもたちはどう感じるのか
- 授業料は親の負担になっていないか
- 独自の教科書を使っている　など

（2）歴史について

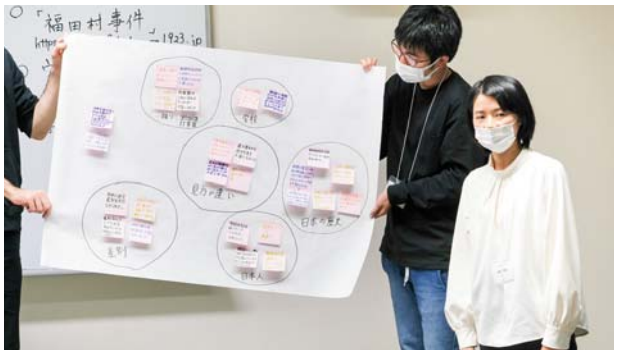
- 学校で習っていない内容が多かった
- 関東大震災時での在日朝鮮人、更に中国人も殺された歴史が衝撃だった
- 植民地時代の歴史を改めて知った
- 今の日本があるのは朝鮮のおかげだった
- 滋賀県は朝鮮のルーツがたくさんあった
- 正しい過去、歴史をもっと学ぶ必要がある　など

（3）差別について

- 日本に残る差別意識の存在を実感した
- 差別は無くせるか？
- 差別と排除の構造を壊す責任
- 差別の心からデマを流したのも日本人、デマから朝鮮人をかくまったのも日本人
- まだ朝鮮人への差別は残っているのか？
- なぜ朝鮮ヘイトがあるのか？　など

（4）その他の意見、感想

- 違う視点から見る大切さ
- ８月15日のとらえ方の違い
- 演奏と踊りが素晴らしかった　など



感想

私自身、朝鮮についての歴史、日本との関わり、差別を持つ人のこと、自分事になかなか捉えることができずにいました。日本で教わる歴史と朝鮮で教わる歴史にはきっと違いがあり、とても根深く現代にも残り続けるものであると考えています。この日、見て聞いてきたことはあまりにも複雑で受講生全体にも消化不良感は残ったのは否めませんでした。今後はこの消化不良感を各自どのように解消していくか。現代においてもセンシティブな問題をどのように受け止めて未来につなげるかは、我々の大きな課題であると認識しました。まずは第一歩「知る」というステップを頂けたことに感謝しています。（若杉　朋子）

第５回　これまでの学びのふりかえり

【開催日時】2023年11月25日（土）
【参加者数】受講生：14人　サポーター：６人
【会　　場】ピアザ淡海
【ファシリテーター】大槻　一彦さん　Glocal net Shiga

《午前》
①問いかけ「どういう時に外国人と言えるのか？日本人と言えるのか？」
②バースデーチェーンゲームでグループ分け
③日本代表チームをつくろう

（１）日本代表チームをつくろう

まず、日本代表にはどんな選手がふさわしいのか、ワークシートにある12個の項目の中でふさわしいと考えるものに個人で丸をつけた。項目は以下の通りである。

Ａ. 日本語が話せる
Ｂ. 日本文化に通じている
Ｃ. 両親のどちらかが日本国籍を持つ
Ｄ. 配偶者が日本国籍を持つ
Ｅ. 名前が日本表記されている
Ｆ. 在留資格を持っている
Ｇ. ５年以上日本でプレーしている
Ｈ. 日本生まれである
Ｉ. 他国の代表に選ばれていない
Ｊ. 顔・格好・肌の色が日本人らしい
Ｋ. 現在日本で暮らしている
Ｌ. 日本で税金を納めている

その後、グループでどの項目に丸をつけたか合意形成を行なった。「Ｂ．日本文化に通じている」など、わかりやすいものはどの参加者も「×」がついたが、その他の項目はグループ内でも意見が異なり、さまざまな疑問も生まれた。その後、グループで考えたことを全体で共有した。すると、ほとんどの項目に対してふさわしいとしないグループが多かった。大槻さんの話によると、子どもたちとこのワークをすると「○」が多くなり、大人とすると「×」が多くなる傾向があるそうだ。

（２）外国につながりのある人物紹介

在日コリアンの井川遥さん、松坂慶子さん、金本知憲さん、みやぞんさん。ウクライナ人の父を持つ滝沢カレンさん、ドイツ系アメリカ人の父を持つウエンツ瑛士さんなど、有名人にも多くの外国につながりをもつ方がいることを知った。そして、相撲界の宮城野親方（元横綱白鵬）は、年寄になるために日本国籍をとったということも紹介された。また、日本国内における民族についてアイヌ民族や、琉球人についても取り上げられた。

（３）各スポーツの世界大会での日本代表はどう決まるか

各グループが一種目を担当して、インターネットで調べた。

【バスケットボール】
- 日本国籍を持っている
- 他の国の代表だったことがないor代表だったが許可を得ている
- 帰化選手はチームに１名のみ

【サッカー】イギリス発祥
- 日本国籍を持っている
- 他の国のＡ代表で公式戦に出場したことがないこと

【ラグビー】イギリス発祥
- 当該国で出生している
- 両親、祖父母のうち１人が当該国で出生している
- 36ヶ月間継続して当該国を居住地としている
- 累積で10年間当該国に居住している

【野球】
- その国の国籍を持っている
- その国の永住資格を持っている
- その国で生まれている
- 親のどちらかが、その国の国籍を持っている

• 親のどちらかが、その国で生まれている
• その国の国籍または、パスポートの取得資格がある
• 過去WBC大会で、その国の出場枠に登録されたことがある　など

以上により、それぞれの種目によって、代表になることができる条件が大きく異なることがわかった。また、条件設定にはそのスポーツの発祥国の考えが影響するといえる。

感想

「日本代表チームをつくろう」を通して、自分が知らず知らずのうちに「日本人観」をもって生活していると気が付いた。本セミナーや国際理解教育関係の講座などで様々な文化やその違いに触れ、学んでいるにも関わらず、意識の下ではそのようなものの見方をしている。日本人として誇りを持つことは大切だが、「日本人は○○」や「日本人としてこうあるべき」という固定概念はこれからの時代を生きる子どもたちの足かせになってしまうのではないかと考える。

グローバル化、多文化共生があたりまえで、在日の方やその他外国人が身の回りに普通にいるこの時代にあって、考え方によっては国籍さえも必要のないものなのかもしれないと感じた。また子どもは身近な大人のふるまいから差別や偏見をもつと聞いたことがある。国籍や見た目の違いから外国人を「自分とは違う種類の人」という思いを子どもたちが持たないよう、一人の大人として意識を変えていかなければならないと感じた。

代表チームに関しては、種目によって様々なルールがあることを知った。どんなスポーツでも、見た目やルーツ、話す言葉が違っても、日本を代表して戦ってくれる選手たちを心から応援したい。

（山越　栄太郎）

《午後》

（1）これまでの学びのふりかえり

①セミナー訪問先のふりかえり

５つのグループにわかれ、「ブラジル人学校（第２回）」、「モスク（第３回）」、「朝鮮人学校（第４回）」、「渡来人歴史館（第４回）」の各見学について、印象に残った言葉や出来事のキーワードを紙に書き出し、そのエピソードを話し共有しながらふりかえりを行った。

話し合いの回ごとにグループメンバーチェンジを行い、常に違うメンバー構成でそれぞれの体験や印象を語り共有し合った。受講生の中には残念ながら一部セミナーに参加できなかった者もいたが、グループ内の他の参加経験者から見学内容等について話を聞くことで、新しい知見や発見を得る機会ともなった。

②オプショナル企画のふりかえり

本セミナーのオプショナル企画として実施された「日本語教室オリーブ見学（９月２日＠キラリエ草津）」、「ベトナム人コミュニティとの交流（10月28日＠ピアザ淡海）」についても、同様に希望参加をした者同士でふりかえりを行った。参加ができなかった者も、そのふりかえりの様子に立ち会い、会場全体で経験・体験の内容を共有した。

③ふりかえり意見の全体共有

グループテーブル上にキーワードを書き出した用紙を並べ、受講生が自由に見てまわり、お喋りをしながら自分が参加したグループ以外の内容も共有した。

＜主な意見＞

【ブラジル人学校】

日本の学校の校舎／山の中の学校でスクールバスで通学／高校生の生徒が大人っぽい／バレーボール

の交流など楽しかった／給食にポテトチップスが出て驚いた／日本社会との接点が少ない／様々なルーツや背景がある

【モスク】

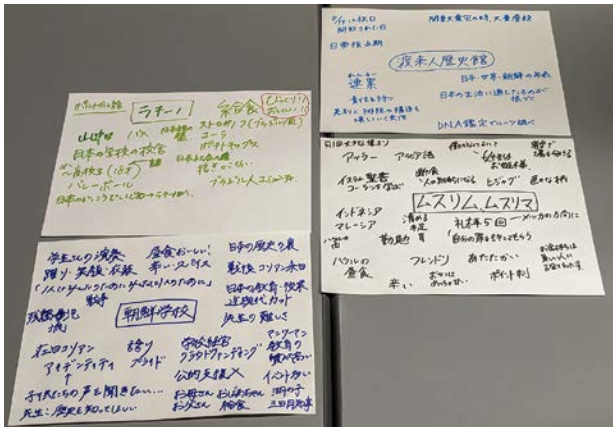
イスラム教はお祈りが多い／メッカの方向に礼拝を５回・自分の罪を許してもらう／男女のお祈りの場所が別々であったが、むしろ合理的な理由で別であった／女性は「お姫様」のように大切にされている印象／長男が親の面倒を見ることが多く、老人ホームが少ない／断食は貧しい人の気持ちを理解するため／日本では仕事中にお祈りがなかなかできないことが困っている／豚肉が食べれないが、ハラールの決まりに沿って処理された別の肉は食べられる

【朝鮮人学校】

親御さんのアイデンティティを大切にしてほしいという思い／子どもたちによる伝統的な踊りや楽器の演奏パフォーマンスにエネルギーや誇りを感じた／子どもたちは日本語とコリアンがミックス　バイリンガル／「一人はみんなのために、みんなは一人のために」をスローガンに／地域に開かれた学校で様々なアクティビティを実施／一方で、今なおある朝鮮に対するヘイトスピーチや日本人がしっかりと学べていない日本の近現代史／歴史を学ぶ大切さと、学ばない危うさを感じた

【渡来人歴史館】

歴史を見ると、同じ文化圏であり、渡来人と滋賀県とは関係も深い／渡来人によってもたらされた技術や知識により発展をしてきた／滋賀県にもある、朝鮮通信使や朝鮮人街道の繋がりや歴史／関東大震災での虐殺など悲しい歴史も。デマや誤情報に踊らされた過去。一方で、同時期にあっても温かい心の日本人もいた／私たちに戦争責任はないが、それを繰り返さない責任はある／戦後、日本から朝鮮半島への財産の持ち出し制限などにより「（祖国へ）帰りたくても帰れない」人たちもいた



（２）グループ発表にむけたグループ分け

本セミナーを通じて関心を持った分野・内容について出し合い、大きく４つに分かれグループとし、最終回でのアクションプラン発表会に向けて各グループ内で方向性や内容を話し合った。

感想

同じセミナーに参加する仲間同士であっても、それぞれ異なる職業や経験、興味・関心を持つ受講生。ふりかえり用紙にはさまざまな視点からキーワードが挙げられており、誰かの新しい発見や深く残った印象が、また別の誰かにとっても刺激になるなど、新しい発見や気付きの連鎖が生まれる場になったと思う。

（村長　とも）

12月16日の発表会に向けて、４班に班分けを行い、その後班内で発表内容について議論した。

個々の本セミナーに参加する目的に応じることができ、色々な背景を持つ人達が混ざりやすいのではないかと意見があり、関心のあるキーワードが同じ人達でグループを作ることに決定した。

下記に、班分けに使用した４つのキーワードを示す。

- やさしい日本語・情報発信
- イベント
- 教育
- 国際意識

班分け後は、各班で発表資料の構成を検討した。連絡先を交換し、12/16の発表当日までに、オンラインもしくは対面で打ち合わせができるようにした。

感想

私自身は社会人であるが、同じグループ内に大学生が２名おり、学生の見方・意見が新鮮であった。大学での交流イベントに参加した際の経験を共有していただいた。その他にも、前向きなコメントが相次ぎ、学生らしい意見に脱帽した。普段自分が接しない人達と協力して一つの物事に取り組むこともある意味、異文化との交流である。相手が日本人であろうが外国人であろうが、自分と異なる背景を持っていることは共通している。どんな人であろうが、相手を尊重し理解するように心掛ければ分かり合えるのではないかと感じた。

（山口　絢加）

第６回　多文化共生に関する講演および受講生による発表会

【開催日時】2023年12月16日（土）
【参加者数】受講生：16人　サポーター：５人　来賓等：14人
【会　　場】ピアザ淡海

講演　多文化共生社会のつくり方
～求められるのは「当事者性」と「専門性」の高い担い手だ！～
《講師》一般財団法人ダイバーシティ研究所　代表理事　田村　太郎 さん

阪神淡路大震災直後に「外国人地震情報センター」設立に参加。95年「多文化共生センター」への改組に伴い事務局長就任。2004年３月まで代表。また「神戸復興塾」事務局長、兵庫県「被災者復興支援会議」委員として、阪神・淡路の復興に尽力。2004年からIIHOE研究主幹。2007年から「ダイバーシティ研究所」代表として、CSRにおけるダイバーシティ戦略や自治体による多様性配慮のための施策づくりに携わる。2011年東日本大震災を受け内閣官房「震災ボランティア連携室」企画官就任。2012年復興庁「上席政策調査官」、14年から「復興推進参与」として官民連携や住民参加型の復興まちづくりの推進にも取り組んでいる。

講演概要

（1）田村　太郎さん自身について

阪神淡路大震災当時、フィリピン人向けのレンタルビデオの仕事をしていたが、普段から生活上の相談も受けていた。震災３日後から、地震で困った外国人のためのホットラインを立ち上げ事務局長を担当した。その後、集まったボランティアたちと相談し「多文化共生センター」へ改組。全国で元祖である。

外国人との共生について活動していく中で、「いろいろな人のちがいが大事にされる社会にならないと、外国人との共生もうまくいかない」と思い、2007年に「ダイバーシティ研究所」を設立した。多様性を大事にすることを主眼に置き、コンサルティングや社員研修など企業向けに仕事をすることが多い。

また東日本大震災の後、内閣官房に呼ばれて現地の復興に関わることになった。公的な支援は、まず住宅復興、次に仕事、学校、公園の順で復興が進んでいく。そのため、民間の支援は、その逆を行ってほしいと考え、公園をつくったり、子育て環境を整えたりすることなどに取り組んできた。

私の仕事は、「多文化共生」「ダイバーシティ」「災害・復興」が１/３ずつとなっている。

（2）多文化共生とは　必要な社会像

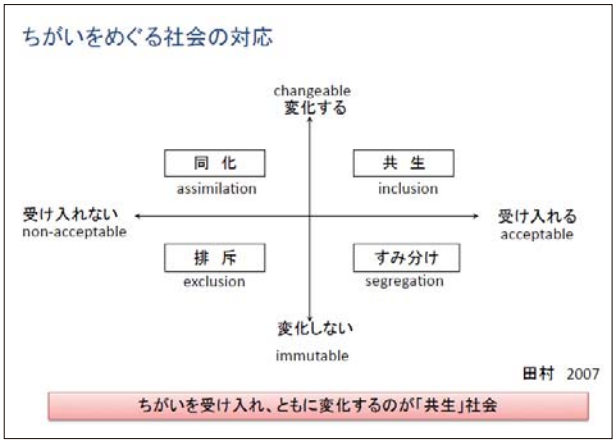
『多文化共生』の定義（2006年総務省）は「多文化共生とは、国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら共に生きていくこと」である。

「多文化共生」という言葉は日本が発祥で、他の言語に訳すのは難しい。「多文化」と「共生」を別々に「Multicultural co-exitance」と訳されることが多いが違和感がある。「多文化主義 Multiculturalism」とも厳密にはちがう。

震災のときの私たちの活動は、日本人が外国人を支援してあげようというものではなかった。いろんな人たちと、ともに被災し、ともに避難所で過ごし、ともにボランティアをしたので、「多文化共生」という言葉を使うことにした。自治体の施策として「多文化共生」という言葉が日本中で広まってきたが、「外国人支援」と同義で使うところが見られ、残念。実際には違っていて、もっと深い意味がある。もっと大事に使ってほしい。

（3）目指す社会とは

ダイバーシティ研究所を設立したときに作った『ちがいをめぐる社会の対応』の図。横軸は「社会がちがいを受け入れるかどうか」、縦軸は「ちがいを持つ人たちが変化するかしないか」である。



ちがいに直面した際の社会の受け止め方には以下が考えられる。

A. ちがいは受け入れない、変化もしない。
例えば、日本社会は日本人だけしか受け入れない、外国人は受け入れない状態は『排斥』社会。

B. 外国人も日本語を勉強して、日本人に合わせるのならば良いとするのは『同化』社会。

C. ちがいを受け入れ、共に変化する社会。この『共生』社会が今求められている。

D. ちがいを受け入れないといけないのは理解できるが、あまりお互いに影響を及ぼしたくない、変化したくない、バラバラというのが『すみ分け』社会。今の世界の現状はここではないか。

ダイバーシティの観点でいうと、セクシャルマイノリティ、男女共同参画などのテーマでも同じ図を使って話すことができる。その際、当事者を交えずに議論をしても問題解決は望めないため、外国人も参加して多文化共生を進めていくことがとても重要である。

バラバラになってしまったこの社会をどうやって共生社会に持っていくか。これから10年20年の全人類共通の課題である。ちがいを受け入れて、ともに変化するというのがポイント。地域で多文化共生を進めていくには、外国人が日本語を覚えて、日本人みたいになっていく方向ではなく、お互いに変化していくのが大事。こちらも変化し、地域社会もどのように変化していくとよいのかということを考えながら、地域で具体的な実践を始めてもらいたい。

（4）多文化共生社会の基盤整備に向けた取り組み

日本政府は、30年前は外国人労働者を受け入れないと決めたうえで、日系人を例外的に受け入れた。来日後の生活支援は何もしなかったが、５年前に新たな閣議決定で外国人労働者を受け入れると定め、受け入れた後の環境整備をすると決めた。2018年末から総合対応策を出したり、「特定技能」という新しい在留資格をつくったり、昨年から５年間のロードマップをまとめ、予算が付くようにもなった。

ロードマップの中で、日本政府が３つのビジョン「安全・安心な社会」「多様性に富んだ活力ある社会」「個人の尊厳と人権を尊重した社会」に従って、４つの重点事項「円滑なコミュニケーションと社会参加のための日本語教育等の取組」「外国人に対する情報発信・外国人向けの相談体制等の強化」「ライフステージ・ライフサイクルに応じた支援」「共生社会の基盤整備に向けた取組」に取り組むと言っている。

具体的解決策

A. 日本語教育の充実

来年から日本語教師が国家資格となる。今までボランティアでやるものと思われていたため、日本語教師は職業にならなかった。

B. 相談体制の強化

自治体が外国人向けに相談窓口を設ける場合、国が資金支援を行う制度がある。実質地元負担０円で相談窓口ができる。現在、約250の自治体がこの制度により相談窓口を設けている。

C. ライフステージ・ライフサイクルに応じた支援

ライフステージとは人生の変化を節目で区切った、それぞれの段階を指す。さらに学校に上がる、卒業する、老後を迎える時など、ライフステージの「つぎ目」の支援が大事である。特にこれから外国人の高齢者が増える。安心して老後を迎えられるかどうかが大変重要である。外国人の老後の生活や墓地の問題などにも取り組まないと、外国人は来なくなるだろう。

D. 共生社会の基盤整備に向けた取組

共生社会の基盤づくりについて課題は見えてきたが、解決のためのリソースがまだまだ少ないのが現状。やっと日本語教師や相談窓口にお金がつくよう

になったが人材がいない。外国人への支援をコーディネートするための人材育成について入管庁で検討会を設置しており、次年度から研修が始まる。とにかく人材が足りない。この５年間で政府からようやく実際の取組が出てきたところだが、これからは地域リソースを増やしていく必要がある。

（５）どうやって多文化共生社会をつくっていくのか

日本でも、介護も子育ても制度はあるが、なかなか出生数は回復しない。これには２つ壁があると分析している。

①第３次産業での労働力が足りない

スウェーデンやノルウェーでも移民や外国人が直接介護や子育てに就いているわけではないが、サービス業に外国人が就くことで、結果的に介護や子育てにも人が回せるようになっている。今の日本では、外国人受入は第２次産業に多い。ようやく介護は増えてきたが、保育分野には入っていない。

②所得が伸びていない

女性の就業率は増えてきているが、非正規雇用が多く、賃金が安い。スウェーデンも非正規雇用は多いが、賃金は安くない。所得が増えないと、子どもの数は増えないので、日本は前に進んでいないと考えられる。男女格差が少ない国の方が、出生数が多いという研究結果が出ている。

人口が減るから外国人を入れましょうというのには反対である。そうではなく、誰もが活躍できる社会とするために、外国人の力も借りませんかという視点が必要である。今地域で起こっている人手不足の職場は、20世紀のままの給料で、20世紀の機械を回していて、もう日本人が来ないので外国人に来てほしいというところが多い。もうそろそろ機械を替えて、給料を上げてもらうほうがよい。日本人より安く働いてくれる人は、地球上にはもういませんということを滋賀県の社長さんたちに理解してもらわないとならない。どうすれば地域全体が持続可能になるのか、今までの働き方ではなく、今までの給料でなく、今までの待遇ではなく、新しい職場に変えていかなくてはならない。そのために外国人の力を借りるんだ。これが、これからの外国人受入である。人が減るから、日本人よりも安く働いてくれる人が欲しいからといって外国人を入れるのはもう終わり。地域にイノベーションをもたらしてくれる存在として外国人の受入れを進めてほしい。そして、外国人に来てほしいなら、まず日本語教師や通訳にちゃんとした待遇で仕事を提供する。多文化共生分野の人材を確保するということが大事。

現在、永住者が全国に86万人、日本で就職する留学生も年間３万人いる。外国人の担い手が活躍できる社会にしていかなくてはならない。滋賀で多文化共生を進める上で、外国人も参加して多文化共生を進めていくということが重要である。

（６）これから人が集まるのは「自由で寛容な居心地の良い地域」

アメリカの都市学者 リチャード フロリダさんが、人が集まる元気な都市の要素は、３つの「T」がそろうことだと指摘している。「技術（Technology)」「人材（Talent)」「寛容（Tolerance)」。なかでも、指標として出したのは、移民に対する寛容性とセクシャルマイノリティへの寛容性の２つ。この２つのテーマ、移民に対して寛容であるかとセクシャルマイノリティの人権が守られるかということが、これからの世界には非常に重要である。同性婚は法律で認められていないが、同性パートナーシップ制度を導入している自治体は200以上ある。国レベルではまだできていないことも、地域独自でやることは可能であるということ。これからの地域社会は自由で寛容で居心地の良い、そういう地域に人が集まってくるのではないだろうか。

【メッセージ】　実際に行動することの大切さ

大学で多文化共生の論文を書いたり、教えたりする研究者は増えた。しかし、実践する人は少ないので、皆さんには実践をしてほしい。

皆さんの発表の中から、１つでも２つでも実現していただき、それが自由で寛容な滋賀、持続可能な滋賀の未来につながっていくとよいなと思う。

感想

日本語教師が国家資格になることを知らなかったので、今後機会があれば是非挑戦したいと思った。海外の文化を持った子たちはそれ自体が強みなので、それらを生かせる社会を形成する必要があると強く感じた。　（目　淑乃）

グループ発表

グループ１：「教育」

発表者：山越、平岡、ブロートン

＜概要＞

（山越さん）

自身が担任する小学６年生のクラスで、「世界に目を向けよう～地球市民の一員として～」という授業を実践した。世界の状況を体験し、知ることを入り口に生徒たちに考えてもらうことを目的に行った。授業の中では「世界がもし100人の村だったら」のワークショップや、生徒たちに地球市民宣言をしてもらうという活動をした。今後も知るだけではなく行動できるような仕掛けを考えていきたい。

（平岡さん）

「外国人幼児の就学前支援」

外国人幼児が言語を習得する環境は整っていない。特別支援学校に行く場合もあり、言語力がしっかり育たないことがある。データを集めて傾向を分析し、日本語教育のあり方を大学院生として検討していく。

（ブロートンさん）

日本に住む外国人の子どもたちの６パーセント※が就学しておらず、また調査データの公表が乏しく、高校に進学している子は30～40パーセント程度と推定される。日本人学生と比較して進学の格差があり、対応が必要だ。（※ Japan Times）

グループ２：「われらは地球人～知らない隣人から、気軽に話せる友人に～」

発表者：山口、ハモンド、是永、若杉、目、池本

＜概要＞

滋賀朝鮮初級学校では、地域との繋がりがある一方、同世代のコミュニティは限られていた。日本ラチーノ学院では、生徒たちが日本社会とつながる場が少なく、社会に出るのを不安に感じているという課題を知った。地域の人にとっても、そこに住む外国人のことを知らないからこその誤解や不信感が生じるのだと思った。これらの学びから、日本人と外国人が気軽に繋がれる場所がない点が問題であると考えた。

さまざまな人が共に暮らしやすくなり、関わった人の価値観が広がるような案として、イベントの開催を考えた。具体的には以下の通りである。

①互いの国のスポーツや音楽を楽しむイベント

②琵琶湖での自然体験

参加者が、個人からグループへ、グループからチームへと変化し、達成感を共有できるようなカヌー体験・ドラゴンボート体験・湖畔でのBBQ

③食交流・多文化共生

ツアー型食材巡りの旅・みんなで食べる試食会・イベント型の多文化レストラン

④県内をめぐるツアー

歴史的建造物巡り・体験型農業レジャー・自転車で自然満喫ツアー

⑤トークフォークダンス

日本人と外国人が向き合うようにして２重の円を作り、相手を変えながら１分間ずつ話す。世代・立場を変えた多様な価値観の理解につながる。

グループ３：「やさしい日本語　多文化共生への共通言語」

発表者：岡谷、折居、永、新山、福士、村長り

＜概要＞

日本に住む日本語学習者は、言語を理解できないことでコミュニティ内での疎外感を感じがちであり、馴染みたいと思っても受け入れてもらえないことも多い。また、1995年の阪神淡路大震災において外国人の死者は日本人に比べて２倍と多かった。言語が通じないことにより情報弱者となってしまい、命が守られないケースがあることが分かっている。このような状況を改善し、異文化の人とつながるきっかけになる共通言語として、「やさしい日本語」というものがある。やさしい日本語は外国人等にもわかるように配慮して簡単にした日本語のことであり、「はっきり・最後まで・短く」というルールで、シンプルな文法・やさしい単語を用いる。コミュニケーションのツールとしてやさしい日本語を知り、外国人と話すときに心がけることで、多文化共生に繋げていってほしい。

グループ４：「どうやって人を巻き込むか」

発表者：相馬、堀井、村長と、本間

＜概要＞

今回の連続セミナーを通じて、日本に住む外国人の状況を知って行動を起こす仲間を増やしたいと感じた。しかし、こういった企画に参加したことがない人にとっては行動に移すこと自体のハードルが高い。多くの人に関心を持ってもらうきっかけとして、日常の会話の中にタネがあるのではないかと考えた。

会話相手が興味関心を持ちやすい話題として、食、旅行、国際情勢などから入っていく案を考えた。韓国旅行に興味がある友人に対し、「私は最近、朝鮮人学校に行ったよ」というきっかけから情報を伝えたり、辛い食べ物好きの友人との会話で、「モスクで食べたものがおいしかったよ」というきっかけから文化を知ってもらうという案である。

感想

自分たちの班は「やさしい日本語を紹介する」というコンセプトだったので、具体的なプランを考え、実行している他の班の発表はとても参考になりました。特にグループ４の、そもそも活動に参加するハードルが高いという視点に共感し、会話の中に自然に入れ込んでいくというのも面白く思いました。今までセミナーで学んだことを足がかりに行動を起こしていくと同時に、これからも自分自身の学びを続けていきたいと思いました。貴重な機会をありがとうございました。

（福士　瑠奈）

田村さん講評

1．課題に対しては議論をかさねて、まとめるプロセスが大事

グループ１と２はメンバーそれぞれが発表され、グループ３と４は一つの内容にまとめて発表をされた。グループ１と２もそれぞれの発表の中に共通点があったので、グループでまとめられると、具体的なものになっていくような気がした。課題に取り組むときに、課題の背景から個々に考えるというのもよいが、議論してまとめる作業というのが実は大事。日本の教育では、これまで議論してまとめるというプロセスはあまり大事にされていなかったので、多文化共生や外国人の人たちを受け入れて新しいルールを決めていくというのが苦手な地域社会となっているのではないかと感じている。こういう機会があれば、みんなでまとめるということにチャレンジされることをお勧めしたい。

2．今の構成員みんなでルールを作り直す、多様な選択肢を受け入れられる社会に

よく講演に招かれたりするが、必ず「日本には、『郷に入りては郷にしたがえ』ということわざがある。外国の人にも地域のルールに従ってもらわないと困ります」という意見を述べる方がおられる。そういう時には、「その郷のルールは、いつ誰が作ったんですか？」と返すようにしている。「今、郷にいるメンバーで、時々、郷のルールを見直していかなくてはならないのではないですか？みんなで作ったルールを、みんなで守るというのが『郷に入りては郷にしたがえ』の本来の意味です」と、私は伝えるようにしている。みんなでルールを作り直していく。当然、地域のルールは守らなければならない。ルールを破れというのが多文化共生ではない。ただ、今は地域のメンバー構成が変わってきているので、今のメンバー構成でもう一度話し合い、どうすればみんなが居心地よく暮らせるかということを話し合う。学校でも、職場でも地域でも、そういう機会を増やしていく。現状のルールに従ってもらうためにではない。これまでは解決策や選択肢は一つであったが、これからは、複数の選択肢が得られるようにしていかなくてはならない。

他国で外国人学校がどうなっているのか調べたことがある。アメリカではチャータースクールという制度がある。教育の多様性がある中で、外国ルーツの子どもの学校も位置付けていた。日本では、そもそも教育の選択肢がない。ちなみに、文部科学省は、外国籍児童生徒は就学義務がないとしているが、あれは嘘。日本が批准している国際人権規約や子どもの権利条約には英語の文章で、『義務教育を提供すること』となっている。しかし、日本政府では「初等教育は義務的なものとする」と訳されている。なぜ日本で外国籍児童生徒が義務教育から外されているかというと、戦後、朝鮮半島出身の人たちが、（朝鮮半島の文化を継承するため）自分たちの教育を自分たちの子どもに受けさせたいので、日本の学校に行かなくてもよいようにしてほしいという話からの措置であった。しかし今、ブラジルやフィリピンから来た子どもたちを公教育から外してもよい根拠となっていることは、どう考えてもおかしい。「外国人は義務教育ではない」という人がもしいれば、「それはちがう。日本も批准している国際人権規約にもちゃんと書かれている」と伝えてほしい。また、地域の私たちのものの見方も変えていかなくてはならない。多様な選択肢を受け入れる社会にしていこうという考え方が大事で、国レベルではできていないことも、地域ではやれることはたくさんあるので、私たちが勉強して新しいルールを作っていくということが、私たちに今求められていることだと思う。

3．できるだけ早い時期に対等な立場で出会う良い機会をたくさんつくる

多文化共生以外の他の人権課題でもいえることだが、できるだけ早い時期に対等な立場で出会うということが大事である。保育園から多文化共生に取り組んでほしい。「外国人の○○さん」ではなく、「お友だちの○○さん」として出会ってほしい。対等な立場で早く出会う機会をつくる。地域で、学校でつくる。いろんな立場の人たちと対等な立場で出会う。出会って知り合いになれば、人はその相手のことを悪くは言わない。自治体などで様々な調査があるが、出会っていない人ほど外国人への偏見を持っているという結果が出ている。出会うということがとても大事だが、出会い方が対等ではなく、バイアスがかかった状態で出会ってしまうと差別や偏見が助長されることになる。

4．アクションを考える時には、まずターゲットを絞る

課題を解決するためのアクションを考えるときは、ターゲットを絞りましょう。「世界平和」や「多文化共生」というのでは話が大きすぎる。誰のどんな課題に取り組みたいのか、まずターゲットを絞るのがよい。いろんな人に理解してもらうのは無理なので、最初に理解してほしいのは誰なのかと絞ったほうがよい。お金も限りがあるし、人生もそんなに長くない中で、有効に時間とお金を使わなくてはならない。どのテーマに取り組むのか、誰に一番伝えるのがよいのかを考えた上で、ターゲットを絞れば、プランは具体的なアクションになる。最初に話したいのは誰なのか、これさえ設定すれば、次のアクションになるので、まずはターゲットを絞られるとよいかと思う。

連続セミナーを修了して　受講生の感想

●実際に人と触れ合えて、知り合えた貴重な機会だった。教師としてここで学んだことをアップデートしつつ、子どもたちに伝えていきたい。

●一緒にモスクに行く人募集中！

●多文化共生というテーマについて様々なことを学べた。４月に引っ越すが、これからもつながってくださる方がいたら、また会いたいと思う。

●皆さんと一緒にいろんなところに行って、いろんな人に会って、知って学べて、すごくうれしかった。海外のこと、日本の外だけでなく、自分たちの地域内での多文化についても知れてよかった。

●自分は社会人だが、意欲のある学生さんたちと出会えて、交流することが、とても刺激になった。京都市内で暮らすようになり、京都市内には滋賀よりも多くの外国人がいるが、寂しそうに歩いている姿を目にすることもあるので、何か自分にできることがないか考えていきたい。

●時々、子連れで参加したが、皆さんが温かく見守ってくださり安心することができた。湖南市では外国人の住民が増えていて、多くの外国人の困りごともそうだが、外国人が多く暮らしているということをまちの強みにしたい！というのが、このセミナーに参加した動機だった。たくさんのご縁をいただいた。

●ここでしかできない、いろんなコミュニティを紹介いただき、貴重なことを経験できたので、この輪をどんどん自分からも発信したいと思っている。

●滋賀に引っ越してきたばかりのときに、自分の中の好きなことが何かと考えた。語学や国際交流に興味があったり、異文化理解、多文化共生に興味があるとわかったので行動しようと思った。滋賀県国際協会のFacebookをフォローした２日後にこのセミナーの追加募集の投稿を偶然見たのが参加のきっかけだった。一人では行けなかった滋賀のいろんなところを訪れ、人と触れ合い、自分が携わりたかった日本語教師の試験を受験した

り、日本語教育に関することに少しずつ進み始めることができるようになった。これに参加しなければ、家で悶々とした日々を続けていたかもしれない。ありがたい機会だった。

●各回でいろんな出会いや気づきを得られて、かつ、田村さんのお話にあったように、今現実にあるところをいかに社会全体を巻き込んで改善していくか、実際にアクションにつなげていかないといけないなと感じている。１対１でつなぐのもそうだが、民間から、ビジネスの持続的なサイクルをつくれるような基盤をつくるところから、将来的に社会変革に関わっていきたい。

●今自分が勤務する組合事業では建設業等の実習生が800人弱いる。モスクではインドネシアの実習生もいたが、このセミナーを通して、自分の仕事の責任というか、これから彼らが自分のビジョンを持って、楽しく快く仕事ができるようになるかを考えさせられた。これから働き方改革もあり、残業ができなくなってくるが、もっとお金を稼ぎたいたいという希望を持っている実習生たちは残業がなくなり、もっと一生懸命仕事をしなくてはならなかったり、もっと外国から人材が入ってくるという時代になるので、それを見越して、自分には何ができるかしっかり考えていこうと思った。

●このセミナーを受ける前は、異文化の人に興味はあるけれど、どんな人たちなのか全く分からなかった。歴史やネットからの情報で偏見しか持っていなかったが、今回、海外ルーツの人たちが抱える事情や教科書で習ったことに関連するその人たちの理由などを知り、自分と同じ生活をしている人たちなんだなと理解することができた。現実のものだと理解させてもらえた。それを学んだ上で、これから外国ルーツの人たちと関わることもあると思うので、この経験をいかしていきたい。

●制度が変わったり、新たな在留資格の特定技能ができた時に県国際課で多文化共生の仕事等に携わっていた。今回、個人として皆さんと出会い、勉強する機会となり充実していた。職業や年齢が様々な人たちと、自分には思いつかなかった発想を共有できたので楽しかった。若手の人たちとこれからのことを考えられたのは心強く感じた。田村さんの話で、視点を動かすことが大事だと思った。行政で仕事していたり、学校の教員、学生さんやお店をしている方など様々だが、きっとどこかで関われると思うので、広い視点で関われたらうれしいなと思う。

●大学で国際関係を学んでいたので、もともと国際の分野には興味を持っていたが、滋賀県でこんな身近なところで暮らしておられる、こんな学校があるということを知れたことが一番大きかった。広い目線で世界情勢を考えることも大事だが、自分がいる場所でそうした方々が困っていることがあったらどうしたらよいかを考えることができたことがよかった。就職してから、自分の興味・関心があったことに目が行き届いていなかったが、このセミナーを通して、シンプルに楽しく、見聞きすることが自分にとって新たな発見となり、こうした活動は続いていくといいなと思った。

●国際問題は自分にとって、身近なことだということを感じた。いろんなところを訪れ、学生やイスラムの人たちの生の声を聞けたのは貴重だったし、みんなで模造紙に書き出したりしながら、自分にない視点や新しいことを知ることができ良かった。休憩中に、個人的に話してくださる方もおられて楽しかった。

●多文化共生というのは遠いものだったが、国際協力の分野で働いている人たちから、いろいろと視野が広がり、楽しかった。参加できない回が多かったので、朝鮮学校やモスクにやはり行きたかった。これからも機会を見つけて、訪問したり、勉強会に参加したりして、理解を深めていきたい。

●コロナ禍で、大学や地元のコミュニティを飛び越えて、直接声を交わすことを、こんなにも与えてもらえたことに感謝している。いろいろと活躍されている分野、仕事、家庭、地域など、活躍されている場所は異なっても、同じ方向を向いて、みんなが暮らしやすくて、お互いを思いやれる社会をつくろうとしている姿勢や言葉遣い、向き合い方に感化された時間だった。個々での学びを通して、実際に、ステキな姿勢や気持ちをいろんな人に与えていける人間になっていきたい。

グループ発表（各グループのスライド）

グループ１

教　育

グループ１　メンバー

山越栄太郎
平岡　恵美
ハリー　ブロートン

世界に目を向けよう
～地球市民の一員として～

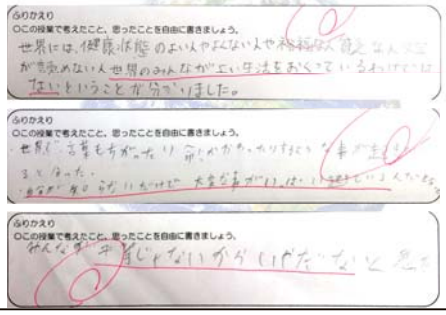
野洲市立中主小学校　6ーI担任　山越栄太郎

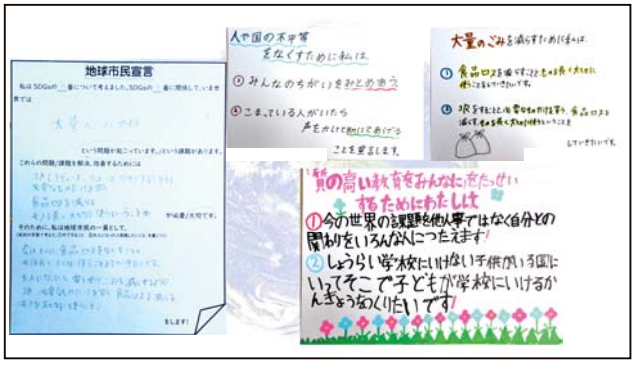
単元目標

世界の課題に対して
・自分が今できること
・将来やりたいこと
を考え、
「地球市民宣言」をしよう！

国際理解に関する学習に
取り組んだ経験がない児童が
世界の課題を知るための第一歩として
↓
「世界がもし百人の村だったら」

児童のふりかえり





外国人幼児の就学前支援

平岡　恵美

問題の背景（１）

骨太の方針
（２０１８年６月１５日閣議決定）

幼児教育の無償化
２０１９年１０月から実施予定

外国人労働者の受け入れの拡大
新たな在留資格を創設

問題の背景（2）

外国人児童５％が特別支援学級

愛知や群馬など、ブラジル出身の外国人が集住する６県12市町の公立小学校で、外国人児童のうち、特別支援学級に通う子どもの割合が、５．０１％、と日本人の倍以上であることがNPO法人の調査で分かった。

（２０１８年５月５日　共同通信社）

12市町ごとの特別支援学級在籍割合

	外国人	日本人
群馬県内	4.94%	1.38%
岐阜県内	7.75	2.89
〃	4.57	2.66
静岡県内	5.14	2.67
〃	6.10	2.22
愛知県内	6.64	1.72
〃	2.66	2.27
〃	4.74	1.89
〃	6.79	2.33
三重県内	3.95	2.37
〃	5.25	1.94
滋賀県内	3.57	3.64
計	5.01	2.26

※調査結果をまとめた国際社会貢献センターは市町名を公表していません

一時的リミテッド状況　　（中島　２００７）

一つ以上の言語に触れて育つ言語形成期の年少者がどの言語も年齢相応のレベルに達していない状況を意味する（中島、2007)

↓

学習困難・自信喪失、または帰属意識に対してマイナスの影響を受ける

一時的な状況であって、環境が変われば解消する健常児の問題

一時的リミテッド状況と機能的な障害とを見分けるのは極めて困難であり、専門家の力が必要な領域である。

就学前教育における外国人幼児の日本語獲得の問題

・日本の就学前教育の場では、積極的な文字の習得を目指す指導をしない。

→　外国人幼児が日本語を学ぶ機会は、日常会話の場が中心になる。

・就学前教育の場で使われる、一次的ことばから、小学校教育以降で使われる、二次ことばへの移行は、日本人のこどもたちにとっても、容易ではない。

→　外国人幼児にとって、より習得が困難だと思われる。

学校教育での学力の基礎となる日本語力を外国人幼児は獲得できているのだろうか。

今後の活動の方向性

日本の小学校に通う予定の外国人幼児に、言語能力テスト、認知能力テストを実施し、子どもたちの発達について理解する。

できるだけ多くのデータを集め、傾向などを分析する。

幼児期の子どもたちの日本語教育のあり方を検討する。

外国人のこどもの不就学

ハリー　ブロートン

小・中学校に通っていない恐れがある子の割合は…（２０２２年度）

６％

8,183人

全体：136,923人

参考：Japan Times

（社説）外国籍の子ども不就学ゼロへ検討急げ

朝日新聞　２０２３年５月１３日

「だが、半数以上の自治体が、外国人家庭に子どもの就学を促す働きかけを行っていない。就学案内を送っていない自治体も２割以上あり、日本語だけの案内を送るケースも多い」

高校に進学している子の割合は……

30-40％

日本人の場合：９８％

EDUCATION SYSTEM IN THE UK

Across the UK there are five stages of education: early years, primary, secondary, Further Education (FE) and Higher Education (HE). Education is compulsory for all children between the ages of 5 (4 in Northern Ireland) and 16. FE is not compulsory and covers non-advanced education which can be taken at further (including tertiary) education colleges and HE institutions (HEIs). The fifth stage, HE, is study beyond GCE A levels and their equivalent which, for most full-time students, takes place in universities and other HEIs and colleges.

The responsibilities of state-funded schools and their admission authorities

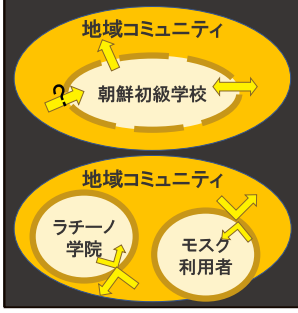
The admission authorities for state-funded schools (maintained schools and academy schools) must not check the immigration or nationality status of foreign national children as a pre-condition for admission.

Admission authorities for state-funded schools:

- must not refuse to admit a child on the basis of their nationality or immigration status nor remove them from the roll on this basis
- must not ask to see passports or other immigration information as a condition of admission (this would be a breach of paragraphs 1.9(a) and 2.8 of the school admissions code)
- with the exception of children who are Irish nationals, must not actively recruit foreign national children who are still resident overseas as pupils

グループ２

①セミナーを通してみえてきた課題



○地域にひらいて、地域の方々と関わる時間をつくっている
○お祭りなど、参加しやすい形での地域とのつながり
△同世代とのかかわりは十分なのだろうか？

△日本社会とつながる機会や場がない
△卒業後、日本の社会に出ていくことに不安を抱える生徒たち
△互いに知らないから生まれてしまう誤解や不信感

②目指す姿

様々な国や文化にルーツがありながら、
現在日本社会で暮らす人々が
同じ地域で**共に暮らしやすくなる**こと

だれでも参加できるコミュニティを通して
関わった人たちの**価値観が広がる**こと

③イベント紹介

ノンバーバル（非言語による）なイベント

①スポーツを通した交流
・言葉が話せなくても参加しやすい
・老若男女問わず楽しめる
・体を動かすことで気持ちもほぐれる

②音楽を通した交流
・各国の人気曲を聴くことで、互いの文化や言語に興味を持てる
・歌詞の意味がわからなくても、音楽を楽しめる

企画❶

ツアー型食材巡りの旅

この企画では1日の中で2、3店舗の食材店を、ツアー型に巡ります。
例えば
1店舗目はベトナム食材店
2店舗目は中国食材店
3店舗目はブラジル食材店
それぞれの出身国の方にガイドをしてもらいながらお買い物を楽しみます。私たちは時々、勇気を出してその国の専門食材を聞くこともありますね。その時に「この調味料はどうやって使うの？」「この果物はどうやって食べるの？」小さな旅行気分で見て回りますがなかなか実際には買わずに店を出ることも。店員さんには勇気が無くてなかなか聞けない。親しみやすいその国出身のガイドが一緒なら気兼ねなく質問したり、普段の食事習慣の話を聞きながら楽しんでお買い物ができます！
そして、もちろん我々日本人がガイドをする時もあります。
あなたの家庭料理の話を是非教えてください！！

企画❷

みんなで食べる試食会

お料理教室の大きな目的は「調理法の習得」お料理教室も楽しいですがここでは「実際に食べてみる」という実食を通した交流の場を目的とします。
コミュニケーションをお互いが持つことを目的としているので持ち寄りパーティー型、または企画❶でお買い物した色んな国の食材の試食をするのも盛り上がりそうです！
イベントとして「楽しかったね、美味しかったね」で終わってしまうのはとてももったいないので必ず各参加者からのフィードバックをもらいコミュニケーションツールとしての調理実習、また可能であればその方の同じ出身国同士のコミュニティパーティーへの参加見学の交渉など。
色んな国籍の方と繋がる、わいわい楽しい試食会です！

企画❸

イベント型
多文化レストラン

更に一般の方への発信として多文化レストランのイベントも提案します！
日本ではなかなか飲食店の起業はハードルが高く、同じ出身国の仲間うちにだけ自分のお料理の腕を奮っている外国人も少なくない、という話も聞きました。
しっかりと営業許可の取れたスペースを使い、期間限定の多文化レストランの開店の企画です！
ルールや規定を遵守してもらった上でのレストラン営業。お客様は同じ出身国の方もいれば日本人の一般の方もランチやディナーで訪れてもらいます。なかなか普段は食べられないお料理が月単位で変わっていくイベントは色んな方に注目されるでしょう。

日常に溶け込む
多文化共生

決して特別なことではない。色んな国の方が隣にほんでいるのは当たり前。色んな国の色んな文化。
知らないから何となく避けてしまう。知ってしまえば大好きになる。たった少しの勇気で、知らない隣人が気軽な友人へ変わることだって。
気軽な友人になったなら、友人のテーブルへお邪魔してみよう。
自分の家に招待してみよう。不思議な調味料を味見させてもらおう。家族との過ごし方や普段の仕事の話もしてみよう。
噂話をする前に。知らないものを怖がる前に。

県内をめぐるツアー
~日本の文化や名所を知りたい,海外に興味がある人をつなぐ~

なぜ県内なのか

- **地元の価値は離れてから気づくことが多い**
  地元は身近すぎるため、その価値を認識できていない場合が多い。あえて県内のツアーにすることで地元の魅力を再発見する機会になる。
- **コストがかからない**
  近場であるため、移動費抑えられるため、気軽に参加できる。

アクティビティ

歴史的建造物巡り

体験型農業レジャー

自転車で自然満喫ツアー

島根県立安来高校

岩手町立川口小学校

トークフォークダンス

- 2重の円になって着席し、フォークダンスのように次々と相手を変えながらお題に沿って互いに1分間ずつ話す
- 世代・立場を超えた多様な価値観を理解し合う
  →住民同士の信頼関係
- 京都府の御池中学校が発祥

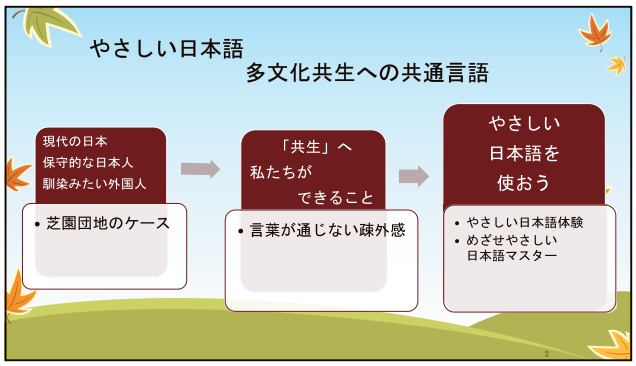
トークフォーク
ダンス
@日本語学校

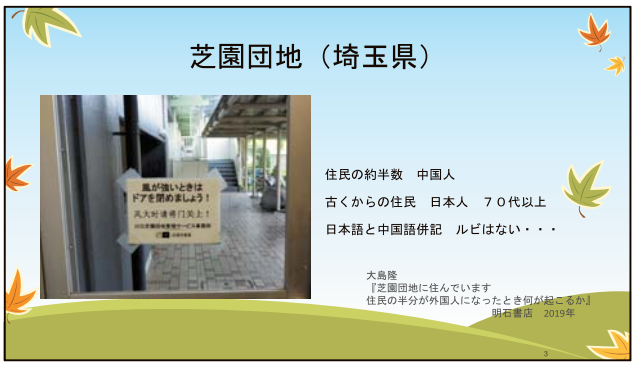
- 日本語学校で学ぶ人
  「日本語を身につけるために、日本人と話したい」
- 地域の人
  「同じ地域にどんな人が生活しているんだろう」
  「じっくり話す機会がない」

→新しい視点や価値観の発見

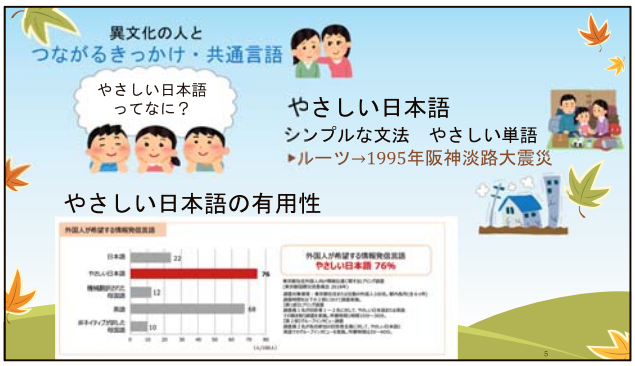
グループ３

やさしい日本語
多文化共生への共通言語
岡谷ともみ　折居夏帆　永　潤
新山晴日　福士瑠奈　村長りか


やさしい日本語
多文化共生への共通言語
現代の日本
保守的な日本人
馴染みたい外国人
• 芝園団地のケース
「共生」へ
私たちが
できること
• 言葉が通じない疎外感
やさしい
日本語を
使おう
• やさしい日本語体験
• めざせやさしい
日本語マスター

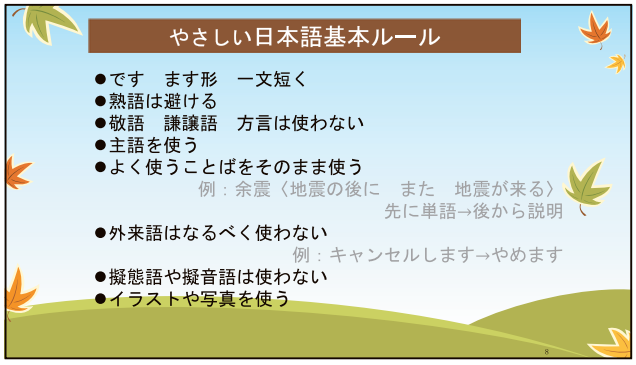

芝園団地（埼玉県）
住民の約半数　中国人
古くからの住民　日本人　７０代以上
日本語と中国語併記　ルビはない・・・
大島隆
『芝園団地に住んでいます
住民の半分が外国人になったとき何が起こるか』
明石書店　2019年

芝園団地のケースより…
共存
同じ空間　交わらない住民
共生
互いに協力しながら生きる


異文化の人と
つながるきっかけ・共通言語
やさしい日本語
ってなに？
やさしい日本語
シンプルな文法　やさしい単語
▸ルーツ→1995年阪神淡路大震災
やさしい日本語の有用性

1995年　阪神淡路大震災
外国人
日本人に比べ
死　者　約２倍
負傷者　約２．４倍
出典　弘前大学人文学部社会言語学研究室
減災のための「やさしい日本語」研究会
原因：日本語不十分　情報弱者に・・・
「ことば」で命と人権を
守ることができる！！！

やさしい日本語ルール
『はさみの法則』
（は）
はっきり、
（さ）
最後まで、
（み）
短く


やさしい日本語基本ルール
●です　ます形　一文短く
●熟語は避ける
●敬語　謙譲語　方言は使わない
●主語を使う
●よく使うことばをそのまま使う
例：余震〈地震の後に　また　地震が来る〉
先に単語→後から説明
●外来語はなるべく使わない
例：キャンセルします→やめます
●擬態語や擬音語は使わない
●イラストや写真を使う

貼り紙などの文章のルール

- 漢字はルビをふる
- ひらがなのほうが分かりやすい
- ことばの区切りにスペースを入れる
- 横書きにする
- 時間は午前午後　表記
  年月日に　／　を使わない

使ってみよう！やさしい日本語

内科→風邪(かぜ)や　お腹(なか)が　痛(いた)いときに　行く　病院(びょういん)

商い中（営業中）→お店(みせ)が　あいています

賞味期限 →その日(ひ)　までに　食(た)べてください

使ってみよう！やさしい日本語

図書館ポスター
「ぺちゃくちゃおしゃべり
気づいてますか？ 周りを見よう」

周りの人の視線を
察する文化
擬音語
伝わりにくい

→「図書館(としょかん)は　静(しず)かです。
小(ちい)さな声(こえ)で　話(はな)してください。」
「小(ちい)さな声(こえ)で　話(はな)します。」

使ってみよう！やさしい日本語

店内でお召し上がりですか？
→お店(みせ)で　食(た)べますか？

一昨日から雨が続いています
→二日前(ふつかまえ)から　ずっと　雨(あめ)が　降(ふ)っています

処方せん

→ 朝(あさ)ごはん　を　食(た)べます。
そして　薬(くすり)を　3個(こ)　飲(の)みます。
昼(ひる)ごはん　を　食(た)べます。
そして　薬(くすり)を　3個(こ)　飲(の)みます。
夜(よる)ごはん　を　食(た)べます。
そして　薬(くすり)を　3個(こ)　飲(の)みます。

→１２月(ねん)３０日(にち)　に　忘年会(ぼうねんかい)があります。

文化の
説明

２０２３年(ねん)　が　終(お)わります。

です　ます形

みんなで　ご飯(はん)　を　食(た)べます。

文を短く

あなた　も　行(い)きます　か？

主語

答えやすさ

『易しい』×『優しい』

やさにちチェッカー (www4414uj.sakura.ne.jp)

まとめ

やさしい日本語とは・・・

異文化の人とつながるきっかけ

多文化共生の
コミュニケーションツール

グループ４

どうやって
人を巻き込むか

Group 4

相馬　大耀
堀井　涼花
村長　とも
本間　有紀

これまで学んだこと

日本ラチーノ学院、モスク、朝鮮初級学校、渡来人歴史館を訪問
コンセンサスゲームなどのワークショップ

私たちのテーマの理由

今回のセミナーは充実！でも実際のところ、、、

- イベント、セミナーに参加する（行動に移す）のは
  ハードルがある。
- 多くの人にまずは関心を持ってもらう
  きっかけづくり　が大切。
- 日常の会話の中に、多文化共生への理解、国際意識を広げるタネがあるのでは！？

私たちのテーマの理由

・日常の会話といっても、
△唐突に難しいことを話しても、うまく伝わらない。

△相手（聞き手）の興味関心によっても、同じことを話しても伝わり方、受け止め方が変わってくる。
（「へー。」で終わるのか、「なぜ？」と関心を持ってもらえるか）

→　話の入り口として、「食」や「旅行」「国際情勢」等身近な話題が興味を持ってもらいやすいのでは！？

身近な話題からの会話例

３つの場面での会話を考えてみました！

.朝鮮人学校
①韓国旅行に興味を持っている人との会話

.モスク
②国際社会ニュースが好きな友人との会話
③辛い食べ物好きの友達との会話

最近旅行の予定ある？

いつか韓国旅行に行きたいなと思ってる

いいね！私は最近朝鮮人学校に行ったよ。

そんな所があるんだ
楽しそう！衣装も可愛いね！
この子たちは何語を話すの？

チマチョゴリみたいで可愛いよね！
授業で朝鮮語の読み書きや発音を学んで、卒業までにはバイリンガルになるよ。

自分の身近に朝鮮文化に触れられる場所があるんだ。
知れて良かった！

最近ガソリン税とか石油関連のニュースが多くない？

確かに多い。
そういえば最近産油国なのに
太陽光発電を進める国の話を聞きましたよ。

中東のどこかの話？
中東はあんまり詳しくないんだよねー。
何か面白いこと知ってる？

あります。あります。中東の方ではないけれど日本で生活しているムスリム、分かりやすくいうとイスラム教の人々の生活を体験したり、お話をしたりするイベントに参加した話があります。

言ってたやつ！
まだやってたんだ。半年くらい？

そっすねー。多分半年位やってた気がする。
時がたつのが早い、早い。

それでムスリムの人ってどんな印象持った？

真面目でかつ笑顔の似合う人が多かった印象でした。
イスラム教を知って欲しいと思っている感じがよく分かる
優しい方々でしたよ。いい人たちだなぁと感じましたね。

特に印象に残ったのはたまにニュースに出てくる女性の着ているあの被り物ですね。ヒジャブという名前の物を見せてもらったんですけど種類がたくさんあって、色がカラフルな物もあってかわいかったですよ。ファッションとして良いと思いましたね。

意外！そういうイメージは無かった。
写真とかは撮ったりしなかったの？

忘れてました。不覚ですね。やっちゃいました。
ネットで探せばあるかもしれないけれど
実際に着てみる体験とかしてみてはどうです？

来年そのイベント受けたらどう？と。ふーん。
ちょっと考えておく。

私 辛い食べ物好きなんやけど、最近食べておいしかったものある？？

最近食べたカレーおいしかったよ！自分で辛さ選べて１０段階のうち８辛にしたんやけど、けっこう辛くてめっちゃおいしかった！

最近どこか行った？？　私も辛いもの好きやし、
辛くておいしかったものあれば教えてほしい～！！

私は最近、イスラムのモスク行く機会あったんやけど、
そこで振る舞ってもらった料理がおいしかったよ！！

こういう料理いただいたけど、どれもおいしかった！
日本の辛さと違ってスパイスの辛さが新鮮やったよ！

え、すごーい！　これなんていう食べ物なん？

名前まではわからへんけど、インドネシアの方たちが作ってくれはったねん～

味染みた卵にもちょっと辛いスパイスかかってて、香辛料で味付けされたチキンとかもおいしかったよ！

イスラム教徒は豚肉食べたらあかんから、豚じゃなくて鶏肉やったよ
あと、アルコールもあかんねんて

日本で生活してて豚肉入ってない飲食店探すのとか、小学校の給食とかで困ることも多いみたい。

イスラム教のこととか全然知らんかったけど、今の聞いて勉強になったわ～

気になってきたし、今度一緒にインドネシア料理食べに行かへん？？

興味もってくれて嬉しい！！　行こ！行こ！

まとめ

◎「行動」に繋げる仲間を増やすきっかけは、身近にある！
◎会話は、自分が話したいことを一方的に話すのではなく、
　相手（聞き手）が興味関心を持ちやすい話題からはじめるのがよい！
△一方で、聞いたこと・見たことを鵜呑みにするのではなく、
　自分なりに考えた上で、自分が感じたことを話すよう心がける。
△また、相手がどういう考え方を持っている人なのか（生い立ち等）や
　相手の考え方を一方的に非難することのないよう　に留意

以上のポイントを参考に、身近な方との会話に取り入れてみてください

個人のアクションプラン

＜相馬＞
・これからも国際理解/ 交流イベントに参加する。
・趣味の合う人をイベントに誘ってみる。
・英語を扱えるようにする。
・農家の人をイベントに誘ってみる。
（農学部なので農業従事者になった時）

＜堀井＞
・食を通じて話題を広げる。学びを深める。
・大学のボランティアセンターの学生に話す。

＜本間＞
・体験を自分だけのものにしておかない
・身近な人に伝えることから！
（☜ 留学生と話すのもおもしろい）
・より深まった多文化共生、国際理解への興味を生かし、学びを止めない
・いつかは仕事でも多文化共生、国際理解について関わりたい。

＜村長＞
・仕事では、多文化共生の視点を常に忘れない。
・今回の学びを、職場の人たちにも共有する。
・国際理解/ 国際イベントに友人を誘って参加する。
・自分自身が、学び気付きを得る機会を無くさない。
（= 身の回りのどんな場所/ 機会/ ヒトからも学びがある！）

おわり

みんなで、多文化共生・国際理解の輪を
広げていきましょう！

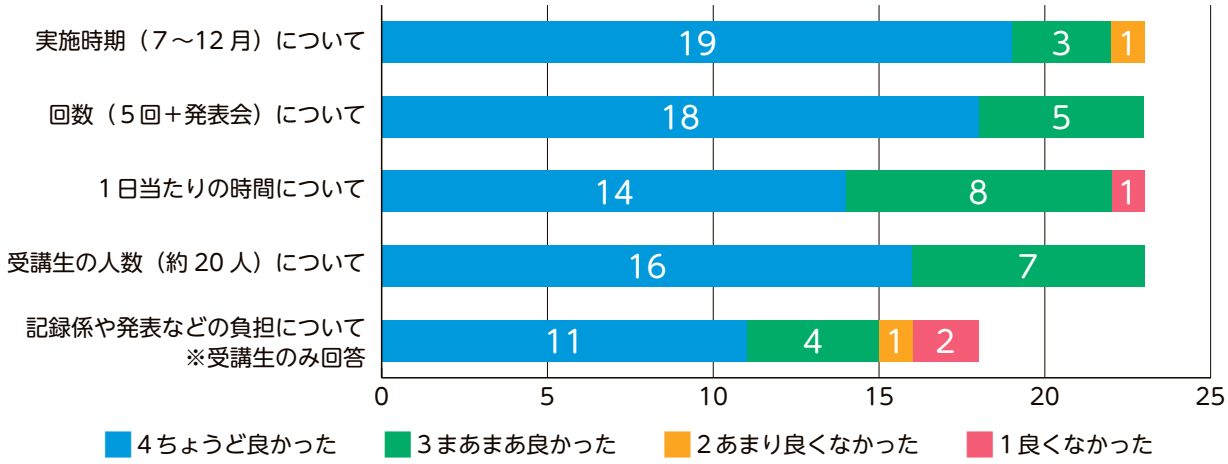
ご清聴ありがとうございました！

アンケートまとめ

2023年度次世代人材育成事業「多文化共生×SDGs×開発教育」連続セミナー参加者アンケート結果

回答数：23人（受講生 18人、サポーター 5人）

セミナー全体の感想

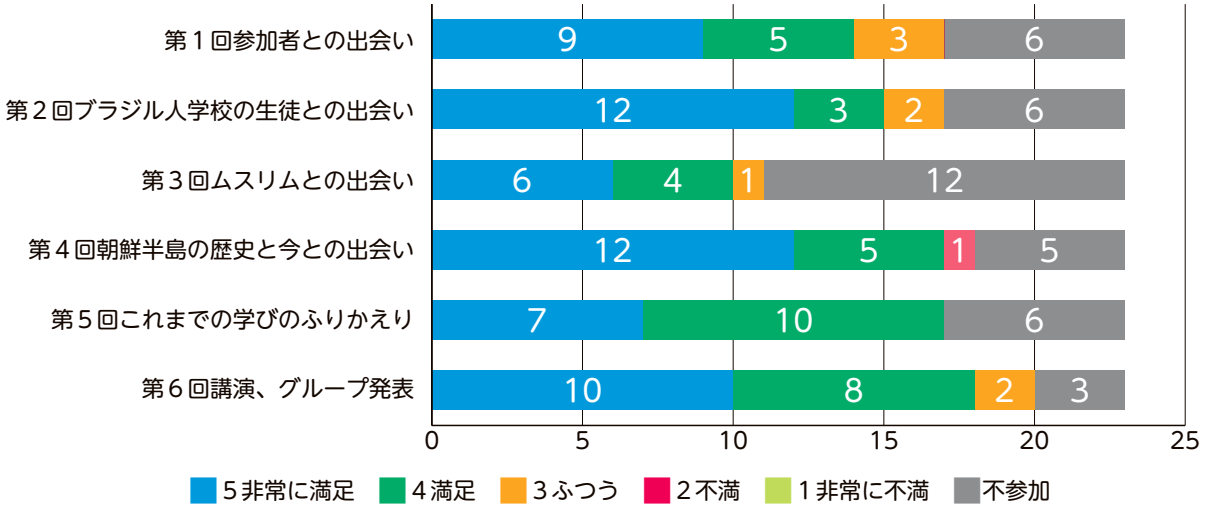


【コメント】（上記で 1 もしくは 2 を回答した方のみ）

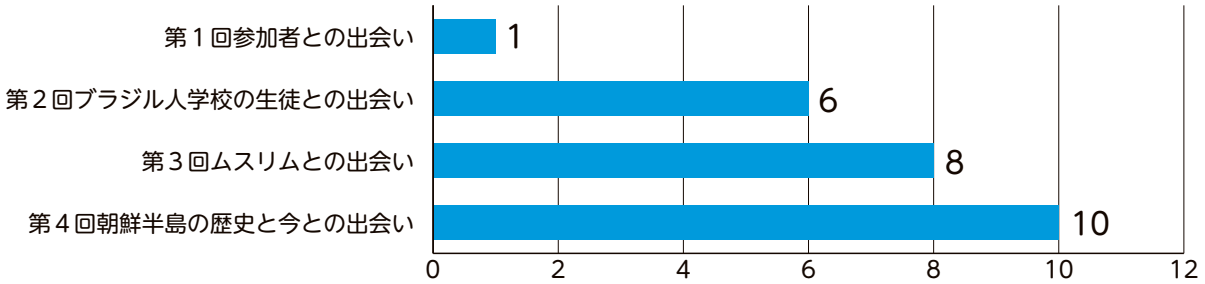
- 実施時期が今年の夏は猛暑ということもあり、移動や活動が体力的にも厳しい部分があるように感じました。（今年は特に想定外の暑さでした・・・）
- 一日当たりの時間が個人的には長く感じました。特に午後からの後半がエネルギー不足になることが多く、集中力が欠けてしまうことも多かったので、もし可能でしたら15時頃終了予定だとありがたかったです・・・。
- 発表が正直なところ負担が大きいように感じました。意見は出るのですが、自分を含めほかのメンバーもディスカッションに慣れていない様子だったため、最後の最後まで発表者が決まらず、意見もまとまらず、制限時間が迫ってきて、やむを得ず自分が発表することが数回あり、精神的にも負担になることが多かったです。
- また、発表に慣れるまで当初の数回は、発表までの流れの指示が理解できず、指示の内容の確認を皆でしているうちに時間が来てしまい、急かされて発表・・・ということがありました。（第二回目のラチーノ学院）
- 意見を出し合い、発表するという流れがある告知が予めあったほうが参加者の負担の減少もあるのかとは思いました。
- また、いつもサポートいただいていたサポーターさん方には申し訳ないのですが、ディスカッションの際のファシリテーターさんによって進め方や雰囲気が全く異なることがありました。うまく引き出してくださったり、誘導してくださる方（去年はこんな意見が出たよー、や、今までこんなことあった？などと呼びかけ、意見を出しやすい雰囲気にしてくださったり）もいらっしゃれば、ただその場に無言でいらっしゃるだけの方もおられ・・・監視をされているにも感じ、私としてはグループも緊張感が漂っているようにも感じました。ファシリテーターとは・・・？と思わずにいられませんでした。ディスカッションに慣れていないのも大きな要因ですが、サポーターさんももう少し最初だけでも話しやすい雰囲気や誘導していただけると、また違った展開になったのかな？とも思いました。
- 第３回にしか参加できなかったですが、時期、時間等は全てちょうどいいと思いました。

- 参加するだけで精一杯で記録係は負担でした。
- 発表に関してはやりたい方優先でも良いかなと思ったのでそのままで良いと思いました。記録係に関して私がかなり苦戦していて、どのような形で記録として残しておいたらまとめる時に良いか、などが分かっておらず苦戦しています。

各セミナーの満足度は？



一番印象に残っている回は、どの回ですか？その理由は？（複数回答）



第１回参加者との出会い

- 第一回目で、大人が学ぶ機会にグッと引き寄せられたことと、ブラジルのラチーノ学院に行ったことです。ラテンアメリカは、自分に慣れ親しんだ文化ということもありますが、他の参加者からも「あのラチーノからスッとこのプログラムに引き込まれた」という声も聴けたので、ラチーノスタート、とても良いと思います。

第２回ブラジル人学校との出会い

- 在日ブラジル人が通う学校が意外と近くにもあることが実感できた。日本社会との接点はほとんどなく、日本人がその学校の存在に気づかないほどであることがとても印象に残った。
- 生徒とのコミュニケーションがたくさんでき、日本に対する考え方を知ることができて良かった。
- ブラジル学校の生徒たちの話、考え方等を聞けてとても有益でした。
- ラチーノ学院に行った日。生徒さんと近い距離で直接話せたこと、バレーボールで一体感を感じたことがとても良くて、一方で生徒さん一人ひとりの思いも知れてよかった。彼らと会った後の帰り道、中学・高校の時の日系ブラジル人の親友やその家族、他にも日本に住んでいる日系ブラジル人の人々はどんなことを考えて各地域でどんな暮らしをしているのだろうとモクモクしました。
- ラチーノ学院で生徒たちと出会った回です。自分自身のアイデンティティも刺激される時間でし

た。海外に出ることで価値観が広がると考えていましたが、滋賀県内で暮らしていく中での共生について考えさせられるものがあり、身近なところにも課題や学びはたくさんあることに気づかされました。

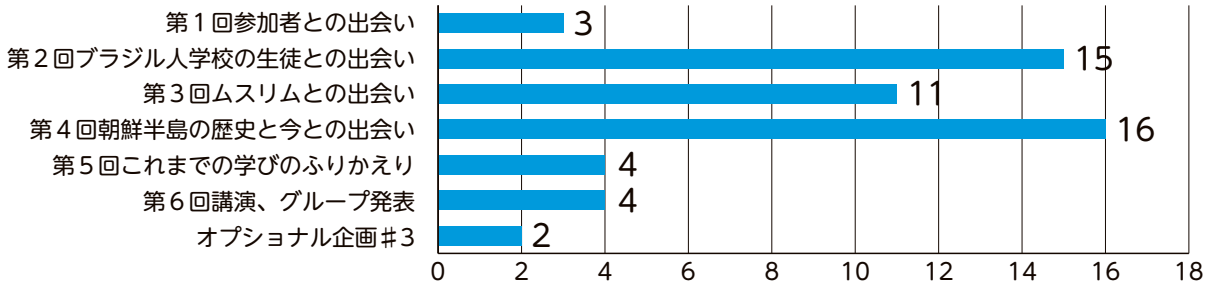
第３回ムスリムとの出会い

- どの回も非常に勉強になったのですが、特に印象的だったのは第３回目のムスリムとの出会いでした。個人的にはこの回の中で、外国人でムスリムの方だけお会いしたことがなかったので、自分の想像が追い付かない出会いだったと思います。また、ムスリム・ムスリマの方からイスラム教の生の声を聴けたのも貴重な経験でした。
- 普段イスラムの教えについてゆっくり聞くことがないため、ムスリムとの出会いの回が印象に残った。滋賀の地域にモスクを建てられたということも初めて知り、行かなければ分からないことが多かったと思うため。
- モスクではイスラムの人たちの考え方や世界観について知ることができてうれしかったです。
- 少人数で話を聞けたので会話しやすかったし、お話してくれた方がすごく明るくて素敵な方で楽しかったから。また、食事も美味しかったから。
- モスク訪問　ムスリムの方々の考えていること、感じていることが直接聞けたから。
- ムスリム。取引先の代表と管理下の実習生がいたため。
- ムスリムとの出会いが１番私にとって印象深かったです。おそらくイスラム教についてほとんど何も知らないのに勝手なイメージだけを持っていたからだと思います。そしてフィールドワークの中で１番当事者の方と直接話す時間が長く取れたところもあります。直の声を聞く。これに尽きるのかな、と思いました。

第４回朝鮮との出会い

- 現場視察ができたから。
- 理事長先生のお話が胸に刺さりました。
- 日本の歴史の知らなかった闇といえる話をお聞きして苦しさを感じたことと、理事長さんが戦後の歴史を知ってほしいと言っていた事が印象的だったから
- 朝鮮半島の歴史（他の２回には参加ができませんでした）
- 日本人として知っておくべき歴史を知るきっかけとなったため。
- 朝鮮学校に訪問し、人権について校長先生の熱意あるお話が心に響きました。
- 朝鮮の学校（私の国ではそのような学校はないから）
- 一番印象に残っているのは第４回で、在日朝鮮半島の人たちの存在や歴史を知らなかったからです。
- 去年もそうでしたが、朝鮮人学校に行けるのは、普段ない、貴重な機会だと思います。

もし来年も同様のセミナーを開催するとしたら、次年度の参加者にどの回をおすすめしますか？（複数回答）



- 「ブラジル人学校の生徒との出会い」参加者の方からとても良かったと教えてもらったので。
- 第４回　そもそも朝鮮人と聞いて現在の北朝鮮を想像する人も日本人の中に一定数いると思うので、固定概念を取り払うという意味でおすすめしたい。
- ラチーノ学院（滋賀では日系の方が身近にいらっしゃってもなかなか交流がないことを知りました。

出会うきっかけとして継続したほうが良いと思います）
- 朝鮮人学校（個人的に歴史問題やヘイトスピーチなども知っていましたが、ほかの参加者の方々の様子から、あまり歴史的な問題には触れてきていなかったように感じたため、知っていく機会を作ったほうが良いと感じました）
- ムスリムとの出会い、朝鮮半島の歴史と今との出会いの回。（学びが深まったため。）
- 不参加した回について何も言えないですが、ブラジル学校もモスクもおすすめします。
- ラチーノ学院、朝鮮初級学校！！モスクは参加できなかったけど、セミナー後も行きたい人がたくさんいるので継続実施した方がいいと思います！
- どの回も新たな発見がある濃い時間でした。
- 第２回・第３回・オリーブ（日本語教室）　不参加ですが第４回もきっと有意義なものだったんだろうなと思います。
- 第２回と第３回。生の声をたくさん聞けた貴重な回だと思ったから。
- 朝鮮半島の歴史と今については、必ず訪問した方が良いかと思います。
- また、ブラジル人学校にもぜひ訪問してもらいたいです。そう考えると全ての回になってしまうのですが、このセミナーでは、個々人ではなかなか行きにくい・SIAだからこそ繋いでもらえる機会へのアクセスが得られると良いなと思います。
- ブラジル人学校・朝鮮学校・学びのふり返り・グループ発表
- 全て行って見て体験して欲しいと思います。が、朝鮮半島の歴史に関しては私の中で最も理解度が薄いのが正直なところです。歴史館では座学の時間が長かったのと全体を通して一方的に話を聞くというスタイルになっていたのが私の理解度が薄いのかも、、と感じます。そして、日本と朝鮮半島の歴史は現在進化系でありセンシティブな課題でもあるところから「どのように受け取るか」にとても神経質になってしまいます。更に勉強が必要、と強く感じています。
- ブラジル人学校に行きたかった
- 私は、朝鮮半島の歴史と今との出会いの第４回セミナーをお勧めします。私は第２回と第３回のセミナーには参加できませんでしたが、日本の共存文化について学ぶことができるので、とても楽しいと思います。
- ラチーノは是非！来年から日本語教師が職業として成り立っていくのなら、オリーブにも、もっと準備して若手を訪問させるのも良いのかもしれません。ムスリムへの理解も、年々重要さを増していきます。彼らの教えを理解することも大事ですが、現在日本で暮らす上で挑戦だと感じているところにもフォーカスを当てて、こちらが教えてもらうだけでなく、こちらとの意見交換や質問などをできる時間が増えると良いと思いました。
- 全部おすすめできます。

新しい訪問先、交流相手、取り上げるべきテーマなど、おすすめがあれば教えてください。

【訪問先】

○神戸アジアン食堂バルSALA

シェフとしての在日外国人の女性の雇用先としても成功されていて、また、お料理も美味しかったので、参加者の交流にもなり、在日外国人の就職や起業などを考えるきっかけにもなるかと思います。

○箕面市国際交流協会　comm cafe（コムカフェ）

伺ったことはないのですが、SALAと同様に生活をされている外国人の雇用先でもあり、また日本人の主婦の方もこちらで働くことで居場所をみつけた、とNHKの番組で取り上げられており、興味深いお店だと思いました。

○神戸市立海外移住と文化の交流センター

ラチーノ学院訪問後にたまたま入りましたが、日系の方たちが日本での最後の生活をどのように過ごされたのかが分かりやすかったです。

【テーマ】

○料理教室

モスクに伺った際、スラメットさんに料理のレシピを教えてほしいとお伝えしたところ、「料理教室を企画してほしい、と伝えておいて」とおっしゃっていました。家でも作って、家族に食べさ

せたいので、お料理教室も企画していただけると嬉しいです。（家でブラジル風ストロガノフをレシピを調べて作ったところ、好評でした）

○防災

命を守るため、そして緊急時に備えて一人一人が何をできるのか、日本人同士でもいざこざが発生しやすい状況の中、そこに外国人が加わるとどうなるのか・・・　非常事態の時こそ、国籍、性別、年齢、職業等など関係なく手を取り合わないといけないと思うので、外国人の方とどのように力を合わせていけるのかを考える機会をいただけたらと思います。

○外国ルーツの小学生・中学生の学習支援

親の都合で来日し、公立学校の通っている子供たちの生活や、学習をサポートしている団体さんなどいらっしゃれば、どのような問題があり、活動をされているのか、自分に何ができるのかを知りたいです。

【交流相手】

○外国人女性の会　パルヨン

代表のハッカライネンさんの講演会に参加し、在日外国人の女性特有の悩みなどがあることを知りました。交流する機会を作っていただけるとありがたいです。

【その他】

- 時間帯が夜間のため難しいかもしれないが、オプショナル企画だった日本語学校では様々な国から滋賀に来られた方と一度にたくさん交流ができたので、プログラムの中の１つにしてもいいなと思った。
- キリスト教会はいかがでしょうか？滋賀には完全に国際的な教会はないかもしれないが、世界中から多様な人々がいつも集まっているし、きっと多くの新しい視点を与えてくれるでしょう。
- 地域で働いている大人（朝鮮初級学校の先生やSIAが定期的に作っている情報誌に取り上げられてる人）
- 海外にルーツのある方々が働く場所にも訪れてみたいです。
- 運営的に大変かもしれませんが、自主的な学びを思うと、すでに行われている多文化共生・国際理解に資するイベントや行事など「行ってみたい・参加したい」場所を選択必修で参加することもありかなと思いました。例えば、「日本語教室」「(市)国際協会のイベント」「出前講座」「災害訓練」などです。
- 今回は学校やモスクなどの訪問であったため、今度は外国人の仕事や働く場所にフォーカスし、キャリア形成の仕方や、外国人が活躍できる受け入れ体制を学ぶのも良いかと思います。
- OKS国際事業協同組合　実習生の日本就業におけるビジョン
- 多文化交流が進んでいる市町への訪問もしたいです！
- ベトナム？これまでの会で取り上げらなかった文化について開催したらいいかもしれません
- 滋賀の琵琶湖の重要性をもっと知ることができればいいと思う。
- 外国人実習生の交流も大事になりますが、これからベトナムだけでなく、ラオスやミャンマーなどの国が増えることを考えると、外国人実習生という括りで理解するのも多様性があってよいかも？あと、エリート層の外国人（教師がエリート層とは思いませんが、大学や企業で研究職についている方々や、生活を回している人々を学ぶと、外国人住民の層が見られて、他とは違う視点が得られるのかなと思います。
- 去年の、難民の方の話を聞く回はとてもよかったと思うので、今後もできたらとても良いと思います。

次年度のセミナーを企画する上で、改善・改良すべき点があれば教えてください。

- 拘束時間が７時間くらいだったのでもう少し短いとよりよい。特に訪問回以外。
- 第４回の渡来人歴史館と朝鮮学校への訪問の順番は入れ替えた方が良いと思った。
- 【オプショナルセミナーの告知】オプショナルセミナーにも参加させていただき、とても勉強になりました。オプショナルセミナーに参加してから、訪問したりメインのセミナーに参加したほうがよ

り深まる部分も多いと思うので、もし可能でしたら予め早めに日程などを告知いただけると、より参加しやすかったのかと思いました。（私自身、パートのシフトが入ってしまい、ベトナム人交流会に参加できず悔しかったので・・・）

- 【社会人の参加層　年齢層の拡大】社会人になってから、自分が思っていた以上にまだ外国人への偏見が根強く残っており、衝撃を受けた経験があります。今回参加されていた社会人の方々が教職の方や公務員の方が多かったため、もっと民間の社会人の方や一般の方にも参加して知っていただきたいと思いました。（告知の問題や興味のある人が限られてしまったり、休日など、様々難しい部分はあるかと思いますが・・・）
- 渡来人歴史館でのお話は、自分自身の体調がすぐれなかったことが原因ですが、少し内容が難しく集中できていなかったと感じました。
- まず、限られた時間や人員の中で、参加者がよりたくさんの学びと気付きが得られるように、と企画調整をいただきましたことに感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。日常の生活に一生懸命になってしまうと、どうしてもこのようなセミナーの内容について考える機会を自分で持つことは難しいので、セミナーへの参加という機会を通じて、各年代職業の方々とお話し考える機会はありがたかったです。その上で、「さらに良く」という観点で考えますと、各訪問に際して、現場で学ぶことも多いのですが、その前の事前学習と、その後の振り返りを自分でももっとしっかりするべきだったなと反省しましたので、事前学習の機会を作っていただいていたように、（もちろん個々人が自発的にやらないといけないのですが・・・）事後にも、お尻を叩く意味で参考文献などの情報をいただけると有難いかと思います。また、最後のアクションプランについて、田村講師からの講評にもありましたが、もっと具体に考えられたら理想なのかなと思いますと、アクションプランについて具体的に考え始めるタイミングが少し遅かったのかなとも感じました。初回および各回の最後に、アクションプランないし「できる行動」を考える時間をみんなでもつと、より良いアクションプランが最後に完成するのかなと感じました。また、参加できなかった回の結果も知り、次の回への参加ができればと思うので、各回の活動報告は次回開催までの間に一定内容で参加者全体に共有されると良いかなと思いました。そうすると、第５回の学びの振り返りの時間がもう少しコンパクトに、よりアクションプランなど行動に繋げる内容を議論できる時間になるのかなと思いました。
- 当事者の方との交流時間、こちらからの疑問質問を解消する時間は多めに取ってもらえたら、と思いました。
- 修了生からのサポートや交流があっても面白いかと思います。もしくは、ラチーノだったら、immi　lab北川さんのようなブラジル人学生を支援しているNPOなどと交流したりする時間があっても理解が深まるでしょうし（その際、ブラジル人学生と日本人学生の間に入ることはせず、第３機関としての参加を望む）、外国籍住民、支援している側の人間の声、そして学ぶ若い人、などの、３本建てが同じ場で学ぶ会があっても面白いかもしれません。そして、学ぶ場は、大槻先生がおっしゃったように、聞くだけでは忘れてしまうので、実際に学習者が発信したり、手足を動かしたりすることで考えや学びが身につくと思うので、それを外国籍住民と支援団体が「教える」立場に立っては「楽しかった」で終わってしまうので、一緒に考える姿勢が望まれると思います。ムスリムでは、一緒に考えるというより、ムスリムから「教えてもらった」感が強いので、とても良い機会になりましたが、覚えていることが少なく思います。一緒に考えたり、聞いたり、聞かれたり、そんな交流が良いかと思います。Glocalの講師の方々も素晴らしいですし、色んな方々に知ってサポートしてもらいたい滋賀ならではの取り組みだと思います。私も来年にVories学園で広報を出しますし、ラチーノの支援になる活動も続けたく思いますし、今の「これで終わり！」ではなく、たくさんの人の関りがある、自分がいつでも関われると思える活動になったらいいなと思います。素晴らしい機会をありがとうございます。Glocalにもとても興味があるので、また今後とも是非よろしくお願いいたします。ニカラグア（うみのこ交流）の件も、またアップデートがありましたら、是非ご連絡ください。ラテンはHomeなので、できることがあればいつでも！

今回のセミナー参加をきっかけに、あなたが新たに何か取り組みはじめたこと、始めようとしていること等あれば教えてください。

公益財団法人滋賀県国際協会　ボランティア	10
公益財団法人滋賀県国際協会　災害サポーター	5
国際教育研究会　Glocal net Shiga（月例会参加）	8
次年度　次世代人材育成事業連続セミナーのサポーター	13
地域の日本語教室、学習支援教室ボランティアサポーター	7

【コメント】

- 時間があえばぜひ参加したいものばかりです！
- 滋賀が今いる外国籍住民、これから来る外国籍住民、そして日本人で外国とゆかりある人々の住みやすい場所にすることは、私自身のHomeをよりよくすることにつながります。何か出来ることがあればいつでも連絡くださいね。
- インスタグラムへの英語での投稿。
- 考え中です。
- 日本語学校のボランティアを始めました。今後Glocal net Shigaにも参加したいと思います。
  ①ラチーノ学院訪問後、学生時代の日系ブラジル人の友人に会い、学校の話や彼女の来日当初の話（お母様は地域の日本語教室に通い、一緒に勉強していたことや、妹たちの学校の進路の懇談などもお母様に代わって彼女が参加していた話など）をしました。また、「あしあとプロジェクト」を紹介し、彼女のひいおじい様の名前も発見することができ、私自身が感動しました。
  ②日本語教育能力検定試験の受験
  ③滋賀県地域日本語推進教育事業（滋賀YMCA）主催の日本語教室の日本語パートナーとしてのボランティア参加、12月～２月のオンライン教室でのアシスタント（パートスタッフ）
  文化庁から滋賀YMCAさんへ委託された日本語教室の日本語パートナー（学習者以上指導者未満のポジション）として、10月～在日外国人の方々と一緒に学習をしていました。プロの先生の指導方法を実際に目にしながら、実際の学習者さんの様子も伺うことができ、勉強になっています。オンラインの今回の期は２月で終わってしまいますが、今度は自分自身が日本語の指導ができるようになりたい、と日本語教員の求人を日々探しております・・・。
- 今後ボランティアなどを探して参加したいなと思っています。モスクなど、他国の文化を知ることができる場所も個人的に訪れようと考えてます。
- 継続的な多文化共生のイベント活動への参加
- 多文化共生への理解を深める講座等への参加や、ボランティア活動など、今回のような学びを継続できて、今後も関わっていけるようなことをできたらと思っています。
- 今のところ具体的なことは何もないが、滋賀の中での国際地域社会とつながりをさらに持ち続けたくて、提供できるサービスはありましたら必ず挑戦していきたいと思っています。
- 日本語を教えるボランティアへの参加。
- 所属校での授業の中でグローバルな視点からの授業づくりができるようになりたいです。JICAに応募します。
- 国際理解教育の授業実践。
- 知人にセミナーをおすすめした。
- 国際教育研究会への参加をできるだけ・・・と思っています。
- 日本語教師養成講座への参加。多文化共生塾への参加。
- 人材紹介業の企業採用担当として、外国籍や障害、年齢性別などによる職業差別の考えがまだまだ日本は根強く残っているため、その固定概念を壊して一人一人の可能性と選択肢を広げる機会を創出できるようにJOBを小口化するなど働きかけを行なっている。
- 識字・読み書きの日本語教室ボランティアへの参加、進路の選択肢として日本語教師。
- 実習生がより実習を円滑にできるよう、各人のビジョンを理解し、一緒に進路をきめる。

- 自分のアウトプットとして体験した内容をインスタ投稿し（料理中心）そこからもともと知ってる外国人ママとのメッセージのやり取りなどが始まった。
- 日本の高校生に英語を教えているので、災害支援ボランティアに参加したい。
- 災害時外国人サポーター研修や日本語指導者養成講座への参加。
- 日本人の人ともっと国際的なテーマで関わり合おうと思いました。
- このタイミングでは特にありません。

その他、コメントなどありましたらご自由にお書きください。

- 今までありがとうございました！
- ７月から約半年間、本当にありがとうございました。企画や調整など私たちが知らない細やかな部分までお気遣いをいただき、安心して参加することができました。感謝しております。
- 自分の本当にやりたいこと、興味があることに挑戦してみよう！とアンテナを張り、情報を探し始めたときに、今回のセミナーを知りました。非常にラッキーだったと思います。
- 貴重な経験をさせていただきありがとうございました。申し込みをした時点では、半年というと長いのかなと感じていましたが、振り返るとあっという間で、どの回もすごく勉強になり充実していました。このセミナーをずっと受けていたいくらい楽しくて、今では終わってしまったのが残念に思います。
- 半年間貴重な体験をさせて頂きありがとうございました！参加して本当に良かったです！！
- 大森さんをはじめ、このセミナーでお出会いできた皆さまからは、私自身の価値観を揺さぶられる言葉やつぶやきを沢山いただきました。様々な立場で生活されている皆さまと、これからの未来にむけて意見交流できたことはとても有意義な時間となりました。
- 良い機会をありがとうございました。参加される皆さん各人で、興味があるところもバラバラだなと思いながら、そういう、似ている仲間だけれども「違う」という点にも学びがありました。
- 大森様をはじめ国際協会やサポーターの皆様のご尽力によって、貴重な体験と学びを得られる機会となり、心から感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。
- ７月から始まり、素晴らしい学びの時間をくださり本当にありがとうございました。
- セミナー受講生の方々も年齢や職業も様々でお話しするだけでとても楽しく、色んな立場からこのセミナーを受けるキッカケになっていることに面白さを感じました。
- 準備段取り、たくさんの方のおかげでこのような素晴らしい時間が自分に頂けたことに感謝しております。ありがとうございました。
- 参加させていただいてありがとうございました。
- 滋賀の全ての国際イベントは大森さんに続いている、中世のローマのような存在です。是非、今後ともご活躍いただき、またお手伝いできる機会がありましたら、遠慮なく声をかけてくださいね。一緒に滋賀を盛り上げていきましょう！

グループ発表に対する来賓からの感想

- 素敵な方々です。アクションにつなげていかれそうな予感がいっぱいです。
- 今後の自身の目標や行動について各自の意見が聞きたかった。
- 受講生の皆さんは意識の高い、行動力のある方ばかりであった。当セミナーが次世代の人材育成、人材発掘に大変有意義であることが良く分かった。
- やさしい日本語の特徴について大変勉強になりました。
- とても皆さん素晴らしかったです！このまま終わらせてしまうのがもったいないくらい。ずっとこのメンバーで情報共有しながら学んでいきたいと願います。

あ　と　が　き

今年度のセミナーで印象に残っていることは、ブラジル人学校の生徒たちが自らのファミリーヒストリーをみんなの前で立派に発表する姿がとてもステキだったこと。その一方で、卒業後、自分は日本社会でうまくやっていけるだろうかと不安を吐露していたこと。また、モスクに来ていた小学生が、宗教上食べられない給食の日にはお弁当を持参していたが、周りの児童たちから好奇の目にさらされたり、自分だけなぜお弁当なのかと質問されるたびに説明するのが煩わしくなり、高学年になってからはお弁当もやめ、白米だけを食べる日もあると話していたこと。そして、朝鮮学校の子どもたちの民族楽器の演奏や舞踊の披露の後、先生がおっしゃった「ルーツとアイデンティティが守られていれば、人として生き生きと生きていける」という言葉などである。受講生たちも、こうした生の声をしっかりと耳と心で受け止めてくれていたようで、毎回セミナー後の感想には共感や新たな疑問などを書き連ねていた。

本事業は２年目となり、昨年度の修了生の中には今年度のプログラムのサポーターとして関わってくれたり、昨年度作成したアクションプランの実現に向けて実際に動き出している方たちもいて、この事業のねらいとしていたことが、早速、効果として見え始めていることをうれしく思う。

せっかくのご縁をさらに広くつなぐため、昨年度の修了生と今年度の受講生、そして国際教育研究会　Glocal net Shigaのメンバーとの交流の機会としてオプショナル企画も５回実施し、より幅広い知見や異なる視点の交換などができた。こうした取組を重ねることで、これから滋賀で国際教育や多文化共生に向けた実践者が育っていくことを願わずにはいられない。

さいごに、本セミナー開催にあたり、快く訪問を受け入れてくださった皆様はじめ、サポートしてくださった皆様方に心より御礼申し上げる。

公益財団法人滋賀県国際協会

2023年度 次世代人材育成事業
『多文化共生×SDGs×開発教育』連続セミナー報告書

発行日　2024年（令和６年）２月
発　行　公益財団法人滋賀県国際協会
〒520-0801　滋賀県大津市におの浜１-１-20　ピアザ淡海２階
電　話　077－526－0931
ＦＡＸ　077－510－0601
E-mail　info@s-i-a.or.jp
ＵＲＬ　https://www.s-i-a.or.jp
印　刷　大津紙業写真印刷株式会社

この事業は、一般財団法人自治体国際化協会の助成により実施されています。

CLAIR
一般財団法人
自治体国際化協会